
とある青年と魔法少女達の物語

HMX-14

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある青年と魔法少女達の話

【Nコード】

N4509M

【作者名】

HMX-14

【あらすじ】

ここは緑溢れる海鳴市、この町で俺は一人の女の子と出会った。その子はまさかの…！

宇宙人の転生主人公となのは達が繰り広げる涙あり、笑いあり、らぶらぶあり、ご都合満載で欲望満開なお話。

プロローグ？（前書き）

初めまして。

小説を読んでもばっかりではアレなんで、書くことにしてみました。
これから宜しくお願いします。

注）オリ主、ハーレムが嫌いな人は嫌悪感を覚えると思います。

プロローグ？

皆さんこんにちわ、俺は天河桂一（22）です。てんかわじゃなくて、あまかわです、某黒い王子とは違うのです。

突然ですが俺は地球人ではありません、所謂宇宙人です。しかし、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイドインターフェースでもありません。

胸貫かれたら流石に死ねます。

まあそれは置いて、そんな宇宙人がなぜ地球にいるのかと言うと、よくある（？）転生つてやつでしょうか。

俺が前にいた世界は戦争が発生しており、その戦争で、嫁……じゃなくて恋人が死にました。

ちよつとプツンしちゃって、理性を失った大猿みたいになり、気が付いたら地球で0歳として2度目の生を受け、今に至ります。

てか、俺は死んだのか？

それすらわかりません。

外見が変わっていないので、ただ退行しただけ？

でも、母親の妊娠時の写真があるので、腹の中にいたのは間違いないかと……。

ん、…説明が長くなってしまいました。

今は父親、母親は亡くなっており、保険金で生活しパチ&スロぷーやってます。

仕事シタクナイ

で、この前、狼で朝一から15：00までの5時間で52000発でたのね！

今日は行きつけの居酒屋で日本酒を飲みまくろうと思って時間潰し

に近くの公園へ久し振りに足を運んでみたら、一人の幼女が寂しそうにぽつんとブランコに乗ってたのよ。

ロリコン検定準1級の俺としては華麗にスルー……………

出来るわけも無く、誘拐犯の如く声を掛けて見ました。

「ねえ、一人でここにいてもつままないでしょ？」

「ふえ…？」

幼女Aが大きな瞳にかすかに涙を浮かべながら俺を見上げる…………、
くうつ…可愛い！反則だ！萌死してしまう！

「…おにいさん、だれ」

あつ、何か微妙に怯えてる…まあいきなり知らない人に声を掛けられたらしょうがないか

「お兄さんはセイギノミカタです、ネバダカラキマシタ」

「…え???」

やはり幼女にはこの高等なギャグは通用しないか…orz

「…あ、あの…………」

俺がorzになってるとおどおどしながらも声を掛けてくれる。

いい子だね、普通だったなら無視するか逃げるよね。

「君が一人で寂しそうだったからお話しようと思ったんだけど……」
「えっ？ほんとに!？」

うお！凄い大声で食いついてきたぞ！

「ホントだよ、お名前はなんて言うのかな？俺は桂一だよ。」

「なのはなのはってゆうの!」

「じゃあ、なのちゃんって呼ぶね。」

「うん！なのははけいいちおにいちゃんってよぶー」

ああ…可愛いすぎる…このままおっもちかえりいゝしたい。

とまあ、俺となのちゃんの出会いはこんな誘拐の被害者と加害者み
たいな出会いでした。

プロローグ？（後書き）

なのはとの出会い編です。本編開始まであと少し続きます

ブローグ？（前書き）

前書きって何書けば良いの
か
思い浮かばない
今日この頃

プロローグ？

なのちゃんと出会ってから、はや1ヶ月が経ちました。
毎日公園で会ってます。

なのちゃんはとても純粋で、俺の言うことを何でも聞きます。

悪く言うとは主体性がないと言うか…、子供ってもっと煩くてワガママなのではないかと……。

ちよいと気になったので、家族の事を聞くと、しょぼーんとながら色々教えてくれました。

以下実況生中継です。

「あのね、おとうさんがびょういんにいて、おかあさんはおしごとで、おにいちゃんとおねえちゃんもふたりでなのはをなかまはずれにするの……（；ー；）」

激力ワ幼女の涙目に萌える俺は、もう手遅れでしょうか……。

よし、整理しよう。

なのちゃんの話しを聞く限りだと。

父親〓入院

母親〓出稼ぎ

兄と姉〓何してるかわからんが、構ってくれない

って感じか…。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは何をしてるの？」

「よくわかんない…、なののはあぶないからはなれてなさいっていわれるの。」

おかあさんが、なのはわがままいわないでおるすばんしてるからえらいね、っていつもいつてくれるの。

だからなのは、みんなのいうこときいていいこにしてるの……」

なんという家庭内不和！なのちゃん可哀想（；；）
このままじゃイカンよね

「なのちゃん、なのちゃんは今のままだと寂しいでしょ」

「そんなことないよ！けいいちおにいちちゃんがまいにちあそんでくれるから、いまはすごくたのしいよ！」

ああ、我が生涯に一片の悔いなし！

「でも、家族の皆とも一緒に遊びたいよね？」

「……………うん」

「じゃあ、自分からいわないとダメだよ。」

「で……でも、わがままいったらいいこじゃなくなっちゃっよ……」

何？なのちゃんって本当に子供ですかー？
相当家族に鍛えられてるな、強敵だぜ。

「ちがぁーっ！ー！」

「にゃっ！ー！！？」

「子供はワガママ言って親を困らせるのもいい子の内に入るんだよ
(多分)」

「そうなの??」

「そうだよ。」

今日、家に帰ったら、お母さんに、皆で遊びたい! って言っ
てら
ん。」

「だめっていわれたらどうするの...??」

も、その半泣きの顔で上目使いはやめて! 俺のライフはもう0よ!

「けいいちおにいちゃん???」

「あ、ああ、ごめんね。」

ちよつと萌え萌えしすぎてたよ。」

「もえもえ??」

その、??してる顔も可愛い、用チエキですわ~~~~!!

「んんっ! ダメって言われたら泣いちゃえ。子供が大人の事情を理
解する必要はないんだよ!」

「おとなのじじょう? よくわかんないけど、きょうおねがいして
みるの! けいいちおにいちゃん、ありがとう!」

はう、その笑顔だけで十分です。

「じゃあ今日はバイバイしようか、もう5時になるしね。」

「ううゝ、もつとけいいちおにいちゃんといっしょにいたいのに、
おうちにかえってもだれもないの。」

「だーめ、子供はおうちに帰る時間です。
また明日会えるからね。」

「いやなの！かえらないの！けいいちおにいちゃんがわがままゆっ
ていってゆったの！」
そっぴいながら俺の膝の上に股がるのはさん……
うぐっ！！

ちやつかり俺も左手をなのちゃんの腰にまわして右手で頭を撫でて
おりますが……
…それがなにか？？

「にゃあゝ、けいいちおにいちゃんになでなでされるのすきなのに、
とつてもうれいようなふわふわするようになるのゝ。」

…こんな調子で、なんだかんだ18時過ぎまで一緒に居ましたよ。
いつも家まで送ってるんですが、一回も家族を見たことがありません。

せめて兄、姉と一緒にいてあげようと思つ今日この頃。

そして次の日

いつもどおり公園にて。

「けいいちおにいちゃんあーん!!」

「あつ、なのちゃん!こんにちわ。」

「こんにちわっ!」

なんかいつにも増して機嫌が良さそうですな。

「けいいちおにいちゃんがゆったとおりに、おかあさんにあそびにつれてっっておねがいしたら、つれてってくれるのー!!」

「おっ!よかったね!だから言ったでしょ。自分の思いは口にしないと伝わらないからね」

「うん!うん!うん!それでね、けいいちおにいちゃんもいっしょがいってゆったら、けいいちおにいちゃんもいっしょでいって!」

オイオイオイオイ!!マジか!!

普通の親からみたら、俺なんか、幼女に声を掛ける変態ロリコンペド野郎じゃないか!!

ヤバイぞ、国家権力の犬を招聘される…。

「それでね!おかあさんもけいいちおにいちゃんにあってみたって、だからきょうのよるごはん、なのはのおうちでいっしょにたべようー!!」

ああ、そんな可愛い顔でオネダリされたら……
断れない……わけないだろ!!

身の危険は事前回避を徹底します。

「いや……ちよつと用事が……。」

「え……けいいちおにいちゃん、きて……くれないの……?」

ふおう!! ヤバい!! しかし、俺の鋼鉄の意思は固……

「うう……けいいちおにいちゃん、なのはけいいちおにいちゃんといっしょがいいの。」

「よし! なのちゃんちに行こうか!! 遊びにも一緒に行っちゃうぞ!」

なのちゃんの半泣き顔は鋼鉄をも溶かすようです。

「わあ! やったあー!! けいいちおにいちゃんだあ! いすき!」

(。o。)

……

そして時は動き出す

「はっはー、俺もなのちゃん大好きだぜ」
俺のテンションが超MAXだぜ!

今なら伝説の超サ ヤ人も弱パンチで一発KOだぜ

でも、何でこんなにもなつかれてるんだろ？

そして、その日の夜までなのちゃんと天河家であそんでいました。主にwinning elevenとか、よぶよぶとかね。ちなみになのちゃんはパズルゲームは上手でしたが、スポーツゲームはダメでした。

ついに18時回りました。なのちゃんのおかあさんは、夕飯は家族で取る事としてるらしく、19時には一回休憩でお店から戻って来るそうです。

なんでも、翠屋という喫茶店を経営してるんだって。

俺は最近海鳴市に引っ越して来たから良く知らないのよね。

ちなみに、新築、1K、22平方メートル、風呂、トイレ別で月々7万。

結構良い物件です。

そんなこんなで只今なのちゃんの家の前です。

何か緊張してきた、自分の娘が、友達って言って二十歳過ぎた男連れてきたら…

はあ？

つてなるよな〜。

「ただいま〜！」

けいいちおにいちゃんはやく〜!」

玄関前でぼーっとしてたら腕を引っ張られてリビング連れていかれました…

ドナドナ〜

「おにいちゃん、おねえちゃん、ただいま」

「ああ、おかえり」

「おかえり、なのは」

なのはのお兄さんとお姉さんね、結構歳が離れてそうです、二人とも中学生位かな

「こんばんは。初めまして、天河桂一です。」

「こんばんは、話しはなのはから聞いてます、なのはの面倒を見てくれてありがとうございます。」

お…僕は恭也です。」

「私は美由紀です。」

二人ともお辞儀しながら答えてくれる。

あゝ、なんというか予想外の対応だな。

もつと不審な目を向けられると思ってたんだけどな…。

でも、恭也君は普通の対応だけど美由紀ちゃんは微妙に……、人見知りっぽい感じかな。

「おかあさんは？」

「母さんなら……」

「なのは、おかえり。」

「ただいま！」

けいいちおにいちちゃんに来てもらったよ！」

恭也君が答えようとした時にリビングの奥から何か凄く見覚えがある人が出て来ました。

なのちゃんのお母さんと視線が合いました。向こうも目を見開いて驚いています。

「あ、あれ？」

なのちゃんの名字って…高町？」

「うん、そうだよ」

やっぱりそつか…じゃあこの人は

「桃ちゃん…」

「っ…！！桂一い！」

桃ちゃんが泣きながな飛び付いてきます。

「桂一、桂一、ごめんね…うう。」

俺はかなりテンパってます。

実は、桃ちゃんとは俺が高校1年の時に付き合ってたのです。

桃ちゃんがパティシエになる為に、イギリス…だったかな？

ヨーロッパの方に留学しちゃって、別れる事になりました。

まさか！元カノの娘と仲良くなって再会とか、世界で俺だけじゃね
???

「お…おかあさん！？おかあさんもけいいちおにいちゃんとおともだちなの??」

「えっ、ええ…。あつ、桂一ごめんね。」

とか言いつつ俺から離れる……、もつとくつついて居たかったが。恭也君と美由紀ちゃんはポカーンとしてる…。

まあそりゃそうか、いきなり母親が良くわからん男に飛び付きゃ、ビックリするわな。

こんな感じでなのちゃんとの出会いから再会が生まれた訳ですが、桃ちゃん結婚してるんだよね…orz
いやゝかなりショックでかいわゝ。

この後は得に何も起きずに楽しい夕食を頂きました。

あつ、そういえば、美由紀ちゃんは桃ちゃんが楽しく話してた事なのか、桂一にいさんと呼んでくれるようになりました。

恭也君はなのちゃんがやたら俺になついているのが気に食わないのか、たまに睨めます。でも、なのちゃんが、

「おにいちゃんより、けいいちおにいちゃんのがすき」

と言った途端、orzになりました。

自分がなのちゃんをほったらかしにしていた事を自覚してるようで。

「今度からお兄ちゃんも一緒に遊んであげるからな！」

とかいって、

「けいいちおにいちちゃんがいればいいもん！」

と返され、余計にorzしている……ちよつと可哀想。

「なのちゃん、恭也君も、なのちゃんの事が好きで一緒に遊びたいんだよ、今度から、恭也君と美由紀ちゃんも含めて、皆で遊ぼう」

「うん！わかった！」

みんなでいっしょのほうがたのしいの！」

「ふふ、なのは桂一の事が好きなのね」

「うん！けいいちおにいちちゃんだいすきなの」

「じゃあ、将来は桂一のお嫁さんになるのかな？」

「けいいちおにいちちゃんのおよめさん……」

うん！うんっ！おつききくなったらけいいちおにいちちゃんのおよめさんになる！」

「よしっ！じゃあなのちゃんが大きくなったら俺の嫁だ！」

「そ…それはゆるさんぞっ！！！」

恭也君が凄い勢いで反対してきた。

おいおい、子供の可愛い願望じゃないか。

とまあ高町家との初対面（一人を除く）は良好な感じで幕を閉じました。

プロローグ？（後書き）

高町家との接触でした。

自分が桃子さん大好きなので、微妙に絡ませてみました。
リリカルなのはで士郎が生きてる事に絶望した…。

ということで、次回は士郎復活編です。

それから一気に無印まで飛びます

それでは次回も宜しくお願いします

プロローグ？（前書き）

士郎さん復活です。

ブローグ？

いきなりですが、なのちゃんの父親が退院するそうです。

なのちゃんがとても嬉しそうに話すので、

俺とお父さんどっちが好き？って聞いてみました。

即答で

ふたりとも好きなの！

でした。

俺としてはそこまで俺に対しての好感度が高いのが

わ、びっくり。

でしたね。

なのちゃんは父親のお見舞いで俺の事を話していて、桃ちゃんの昔の友達であることも伝えているようで、早速会ってみたいとの事です。

明日会うのですが、死亡フラグが凄い勢いで建築されてる気がします。

と、言うわけで今日はもう寝ます。

おやすみ〜 z z z

ああ、遂になのちゃん父と会う日が来てしまいました。
既に高町家の玄関です。

「けいいちおにいちゃん、いらっしやーい」

で、なのちゃん父とご対面…

うん、見た目は優しくそうなお兄さんって感じかな。

「初めまして、天河桂一です。」

「ああ、初めまして。僕は高町士郎だ。宜しく。」

普通だ、いたって普通過ぎる。

「さて、今日来てもらったのは、うちのなのはお世話になったみたいだね、まずはお礼を言いたくてね。

ありがとう。」

あら、そんな対応ですか。

桃ちゃんと知り合いつてのがかなりきいたのかな

「いえ、お気になさらないで下さい。

小さい子供が、昼間とはいえ、一人で居たのが気になっただけです。

」

「声掛けたのが、桂一にさんみたいに優しい人で良かったよね」と、美由紀ちゃん。

優しいのは否定しないが、俺はちょっと変態ロリコンだから、一概に良かったとは言えないけどね。

…絶対に言わないけど。

「ああ、そうだな。

さて、桂一君に厚かましいがお願いがあるんだ。」

「はい？なんででしょうか？」

「これからも、なのはの相手をお願いしたい。」

「…正気ですか？」

「本気かと聞かずに正気かと聞くのが気になるが……、理由としてはうちは喫茶店を経営してね、

桃子一人に任せきりにするわけにもいかなく、来週から僕も出ることになるんだ。

そこで、またなのはが一人きりになるのを防ぐためにもお願いしたいんだ。」

おいおい、俺は保育士だよ。

「幸い、なのはも、桂一君を気に入っているみたいだしね。」

「うん！わたしもこれからもけいいちおにいちゃんといっしょにいたい。」

俺としては全然かまわないんだが……。

「恭也君と美由紀ちゃんは??」

「本来なら、俺と美由紀が面倒を見るべきなのですが、学校がありますし、放課後のくんれ……いえ、部活もありますので……」

「わかりました、お受けいたします。」

「そうか、ありがとう。」

「……もうこんな時間だ、そろそろ桃子も戻ってくるだろうから、今夜はうちで夕食を食べていかないかい?」

「わあ、そうしょ! けいいちおにいちやんとごはんなの……。」

「なのちゃんが喜んでるんだから、食べていかないわけにもいかないよな。」

「それでは、お言葉に甘えさせてもらいます。」

「ああ、桃子との事も聞きたかったしな。」

「うっ。今なんかすごく嫌な予感が……。」

「ただいま……。」

「どうやら桃ちゃんが帰ってきたらしい。」

「あっ! おかあさんおかえり!!」

「ただいま、なのは。」

あら、桂一まだいたの。」

ん？俺が今日来るって事は知ってたのか。

それにしても……

「まだいたの、って酷くね？」

あと、俺も飯を食わして貰うことになったから俺の分もよろしく。」

「あ、ごめんね。じゃあこれからご飯の準備するから、土郎さん手伝ってもらっていいかしら？」

「あ、ああ……。」

何か呆然としながら桃ちゃんのことについていったが、どうしたんだろ？

「桂一にいさん、勉強で見てもらいたいところがあるんだけど良いかな？」

「ええー、おねーちゃんだめなの！けいいちおにいちゃんのはなのはとあそぶの！！」

そう言ってくれるのは嬉しいが、美由紀ちゃんが俺にお願いなんて初めてだからな

美由紀ちゃんに答えてあげたいな。

「よし、じゃあなのちゃんも一緒に勉強しようか。」

「うん！べんきょうするの！！」

と、うまくなのちゃんを丸め込んで、美由紀ちゃんの勉強を見てあげました。

なのちゃんは開始5分位で寝てしまいました。

もちろん、俺の膝の上ですが、なにか。

そんなこんなで30分後、どうやら夕食ができたようです。
早くないか???

で、高町家の夕食中ですが、ここでちょいとめんどくさいことが・・・
すべては桃ちゃんの一言から。

「そついえば、桂一って今何してるの?」

普通にサラリーマンとか言っておけば良かったんだが、
基本的に俺は考えるより先に言葉が出る性格であるため、

「ん、スロぷしてて。」

なんて本当のことを言ってしまった。

「え??」

「うあ!しまった、ついホントの事を言ってしまった!」

「桂一のお母さんがそんな生活よく許してるわね。」

桃ちゃんは、俺の母親とは結構仲がよろしかったのでうちの母親が
ぷ生活に許す人じゃないってのは知ってるんだよね。

「うん・・・父親と母親はもう死んじゃったからね、何しても起こられることはないよ。」

「えっ・・・・・・・・？ホントに????？」

「流石にこんな事で嘘つくかよ。」

桃ちゃんは両手で口元を抑えて・・・・あれ、泣いちゃった。

「・・・・・・・・な、なんで？」

「父親は癌、母親は交通事故だね。
だから今は一人で、両親の保険金で生活してる。

ちょうど大学4年の時に2人とも亡くなってね、就活なんてまったくやる気が起きなかったのね。」

「・・・・・・・・ごめんなさい。」

「けいいちおにいちゃんには、おとうさんとおかあさんいないの？」

「そっだよ。」

「じゃあかぞくがないの？」

「そっだね、俺には兄弟もないし、爺さんと婆さんも亡くなるから、天涯孤独ってやつだね。」

「けいいちおにいちゃんかわいそうなの！なのはがかぞくになる！」

「そつよ！」

うお、今まで呆然と泣いてた桃ちゃんがいきなり大声を上げやがった。

「どうしたんだ桃子？？」

「桂一をうちの養子にしましょう！」

「「「はあ！？」「」「」

なのちゃんと桃ちゃん以外の声がハモったね。
そりゃそつだろ、いきなり何言い出すんだこいつ、頭大丈夫か？

「アホか？何で俺が養子なんだよ！」

「そ、そつだぞ桃子、いきなり過ぎるだろう。」

「桂一にいさんが本当のにいさんに……………良いかも。」

「俺に兄ができるのか……………良いな。」

「かぞくになつたらずつといっしょなのー！うれしいのー！」

おい！何故俺と士郎さん以外が賛成なんだよ！

「桃子！その前に一つ聞きたいんだが、桂一君とはどんな関係だったんだ？」

年も結構離れてるし、幼馴染なのか？」

流石に元カレとかそんな事言わんよな・・・
俺が専制防御をするしかない

「いえ、ただのとも「元恋人よ。」だ・・・っておいつ！」

「あら、嘘を付く必要は無いじゃない。」

「そうか、元恋人か、・・・恋人だと!!!?」

何か凄い殺気を巻き散らかしてますよ、このおっさん。

「あら、士郎さん、”元”恋人よ。

士郎さんだって、私と結婚する前に結婚してるじゃない。
私に”元”恋人がいても不思議じゃないでしょう?」

やたらと”元”を強調するなよ・・・所詮昔の男って言われてるみたいで微妙にヘコむから。
まあ実際にそうなんだけど・・・。

「うっ、それはそうだが。」

「で、どう?桂一?」

「嫌。」

「なんでよ???」

「だって、家族になつたら将来なのちゃんと結婚できないじゃん。」

「えっ?かぞくになるとけいいちおにいちちゃんのおよめさんになれ

ないの？

「そうだよ、家族は結婚できないんだ。」

「じゃあかぞくになっちゃだめなの！」

「そっか、なのはと桂一が結婚すれば息子になるわね、それでもいいわ。」

「わ、・・・私も、桂一にいさんと、け、・・・結婚したい。」

美由紀ちゃんが小さい声で顔を真っ赤にしながら桃ちゃんに言うてる。

あれ？何で美由紀ちゃんまで？？

毎日メールはしてるが、それだけだしなあ。

「じゃあ、おねーちゃんとなのはがけいいちおにいちゃんのおよめさんだね！」

「あら、桂一モテモテね。」

そんな会話をしていると、背後からものすっごい黒いオーラを感じるのでしょ。

「桂一君・・・、うちの娘が欲しければ、この私を倒してからにしてもらおうか。」

「桂一さん・・・うちのなのはと美由紀が欲しければこの俺を倒してからですよ。」

士郎さんと恭也君が、ヤンデレっ子みたいに目のハイライトを失わせながら小太刀を抜刀してますよ。

・・・ってか何故に小太刀!?

やばい、あれは本気で殺る眼をしている!!

「士郎さん、恭也、未来の息子に何をしようとしているのかしら」
怒」

ものすっごい笑顔で士郎さんと恭也君を威圧している桃ちゃん。

この笑顔が怖いんだよね。

2人ともガクブルしてますよ。

それより桃ちゃんは仕事に戻らなくていいのだろうか。

桃ちゃんがいなくなったら殺られるから絶対に言わないけど。

こんな形で俺と士郎さんの初対面は過ぎていきました。

そして、俺がなのちゃんと出会ってから何年かの年を重ね、なのち

やんをちょうky

・・・もとい教育し、

ケイイチオニイチャンイチバーン！オトウサンニバーン

と言われるまでになりました。

ついでに、土郎さんとはリアルファイト寸前　なのちゃんに止められるといった日常が追加されました。

で、俺の友達（？）になのちゃん繋がりで幼女が2名追加されました。

アーちゃんとすずちゃん

アーちゃんはアリサ・バニングス、すずちゃんは月村すずか。

両人とも家がお金持ちなんだよね。

特にアーちゃんの方は、世界規模の超一流企業（俺でも名前は知ってた）のお嬢様なのよね。

生意気でツンデレなガキで、全然お嬢様っぽくないけど。

逆に、すずちゃんは、おしとやかで、ほんわかしてて、かわいくて、ほんとにお嬢様だね。

新たな出会いが増え、俺は桃ちゃんと土郎さんが経営している喫茶店”翠屋”でバイトすることになったり、自分が宇宙人だって事も忘れる位に楽しい日々が流れていきました。

しかし、なのちゃんが小学3年になったとある日、俺の人生（なのちゃんもだけど）は全く変わってしまった。

ああ、俺はずっとこのまま平和に暮らしていたかった。

戦いキライ!!

プロローグ？（後書き）

プロローグ終了！

やっと次回より無印突入です。

桃子さんとの話や、端折った部分は、外伝って形で別の機会にかこうかと思っています。

魔法少女リリカルなのは…なの（前書き）

やっと本編開始です。でもあんまり進まない…。

魔法少女リリカルなのは…なの

みなさんこんにちわ！

高町なのはです！

小学3年生です。

今朝は変な夢を見ました。

でっかい黒いお化けみたいなかたまりが、公園であばれてました。それで、わたしと同じくらいの男の子がおそわれてました。そこで目がさめたのですが………

ガチャ

「なのは、ご飯よ、起きなさい。」

わたしのおかあさんが起こしに来てくれました。

「はい、いまいきま〜す。」

それからわたしは小学校の制服に着替えて家族で朝ごはんを食べました。

おとうさんとおにいちゃんとおねえちゃんももう起きていて、わたしを待っていてくれます。

朝ごはんとは必ず家族みんなで食べることが高町家のきまりなのです。

「なのちゃんは相変わらず朝起きるのが苦手みたいだね。」

「けいいちおにいちゃん！おはよー！！」

この人は、わたしの大好きなけいいちおにいちゃんです。
わたしが小さい時に、いつもいっしょに遊んでくれて、とっても
やさしくてあったかい人です。

おかあさんと同じくらい大好きです。

おとうさんよりも好きです。

しょうらいは、わたしをおよめさんにしてくれるんです。
とっても嬉しいの！

けいいちおにいちゃんのおよめさん・・・・・・・・

にゃ〜。

むねがきゅ〜ってなっただわわ〜んってなるの！

けいいちおにいちゃんのおひざの上にすわって、
後ろからぎゅってされながら頭をなでられるのがお気に入りです。

たまにうちに泊まってくれる時があるのですが、
その時はいっしょにおふろに入って、いっしょにねます。
泊まってくれる時は、ず〜っと抱きしめてくれるからとってもしあ
わせなの！

でも、いつもおにいちゃんとおとうさんとケンカしそうになるの。

けいいちおにいちゃんに抱きついてたりすると、

なのは、俺の方においで、って言うてくるんだけど

けいいちおにいちゃんのがいい！

って言うと、木の棒を持って、けいいちおにいちゃんを追いかけ回すの。

だからわたしは、いつもけいいちおにいちゃんをいじめちゃだめっ！！

て言うてるのですが、ぜんぜん変わりません。

けいいちおにいちゃんをいじめるおとうさんとおにいちゃんは大好きなの！

って言うのと止まってくれるので、必ずそう言う事になっています。

けいいちおにいちゃんですが、わたしの本当のおにいちゃんではないです。

わたしがそう呼んでいるだけです。

本当のおにいちゃんだと、およめさんになれないって聞いたから、本当のおにいちゃんじゃなくて良かったの。

でも、けいいちおにいちゃんも家族みたいな感じです。

けいいちおにいちゃんは、おとうさんが作った翠屋というお店でお仕事をしています。

だから、朝ごはんはうちに来て一緒に食べるの。
わたしの席は、必ずけいいちおにいちゃんの右隣なの。
左隣にはいっつもおねえちゃんが座ってます。

おねえちゃんもけいいちおにいちゃんが好きって言ってました。
いっつも抱きついてるなのはがうらやましいってよく言うのですが、
じゃあおねえちゃんもぎゅってすればいいの！
あったかくて、ほわわ〜んってなるの！
っていっつも言うのですが、

恥ずかしいよ〜。

って言って、体をくねくねしています。

・・・よくわからないの。

こうしてわたしのいつもと変わらないはずの一日の始まりました。

どうも、みなさんこんちわ、桂一です。

なのちゃんと出会ってから、もう数年経ちました。

いやー、時が経つのは早いね。

俺は、スロぷから抜け出し、翠屋でバイトしてます。

最近と同じバイトの子と結構仲良くなって、ごくたま〜に遊びに行ったりしてます。

俺にもやっとな春が来る！・・・かも。

1日の基本的な行動は

朝起きて、なのちゃんち行って、翠屋行って、学校帰りのなのちゃんが翠屋に来て、

なのちゃんちで夕飯食べて、なのちゃんと美由紀ちゃんと遊んで、帰って寝る。

なのちゃんずくしですな。

だって、なのちゃんかわいいんだもん、しょうがないじゃん。

でも、趣味である、年齢制限があるゲームがほとんど出来なくなつたのが悔やまれます

おっと、16時になりそうな時間になったのですが、なのちゃんが翠屋に帰って来ません。

いつもは15時頃、遅くても15時半には帰ってくるんだけど。

カランカラン

と思っていると、来客を知らせる鐘がなのちゃんの帰宅を知らせてくれました。

「なのちゃんおかえり！」

「けいいちおにいちゃん！ただいまー！」

「ただいま、けいいちにいさま。」

「ただいま。」

「お？お帰り、今日はすずちゃんとアーちゃんも一緒なのか。飲み物はいつものでいい？？」

「うん！すずちゃんとアリサちゃんもいつものね。」

そうです、俺はすずかちゃんに、にいさまと呼ばせてます。半分ギヤグで桂一兄様って呼んでみ？

って言ったら喜んで呼んでくれるようになりました。

アーちゃんは普通に桂一って呼びます、アーちゃんの声でおいちやんって呼ばれてみたかったんだが。

この二人は、なのちゃんが小学1年の時に拳で語り合って仲良くなり、

それ以来、俺とも付き合いが出来ました。

二人ともかわいいよ……。

「ところで今日は少し遅いけど、何かあったの？」

「けがしたフェレットさんを見つけて、病院に連れて行ってたの。」

そんなこんなで18時になり、俺の仕事終了の時間となりました。
ちなみに、俺は開店から18時までと決まっています。
なのちゃんが一人にならない為の配慮です。

恭也君と美由紀ちゃんがいるんだからいいだろ、
とも思ったのですが、なのちゃんが俺と居たいということでした。
りました。

「アリサちゃん、すずかちゃん、ばいばーい！」

「なのは、また明日ね。」

「なのはちゃん、ばいばい。」

二人は、翠屋に迎えに来た車で帰りました。
さすがお嬢様。
高級車のお出迎えとはね。

そして、その日の晩、今日もなのちゃんちに泊まっています。

たすけて！

お願いします！

この声が聞こえてる人！

助けてください！

俺はびっくりして飛び起きた。

隣で寝てたなのちゃんも同時に飛び起きたので、声が聞こえたようだ

「けいいちおにいちゃん！今の聞こえた！？」

「聞こえたぞ。ちっ、おれとなのちゃんの安らぎスリーピングタイムを邪魔しやがって。」

「??? やすらぎスリーピングぐたいむってなに???」

「気持ちよく寝ているところって意味だよ。」

「そうなんだ、けいいちおにいちゃんは物知りさんだよね！」

たすけてください！

「うるせえな、知るかボケ！」

「ねえ、けいいちおにいちゃん、助けに行こうよ。」

「え？でも、こんな時間だし、明日でいいんじゃない。」

「困ってる人がいたら助けてあげないと！」

「けいいちおにいちゃんがそう教えてくれたの！」

「うぐう。」

自分で言った事でこんなことになるとは・・・。

「ほらっ、いこっ、けいいちおにいちゃん。」

「よし、じゃあいこうか。」

「うん！」

「つと、その前になのちゃん。」

「なあに？」

「着替えようか。」

で、土郎さんと恭也君に見つからないようにコソコソ高町家を抜け出し、
声がするほうにやってきました。

てか、この声って魔力を媒介にした通信魔法だよな。
なんでなのちゃんに聞こえるんだ??

「えええええ!!! けいいちおにいちゃん!!! なんかすごいよ!!!
!!!」

気が付くと辺りの風景が歪んだ状態になっていました。
明らかに結界内部に侵入しちゃったよね。

「これは、結界だね。」

「けっかい???」

「周りを破壊しないように空間の一部を捻じ曲げるんだ。
基本的な魔法だけど、ここまで広範囲でしっかりと術式が組
んである結界は久しぶりを見るね。」

この結界を作り出した術者は、結構な実力者だね。」

「ほえ???まほう???」

あつ、なんか色々混乱してるね、まあ初めて見る常識外の事象だからしょうがないけど。

「この先から声を届けてきた魔力の反応を感じるから、とりあえず行こうか。」

詳しい説明は帰ったらしてあげるよ。

「う・・・うん、よくわかんないけど、けいいちおにいちゃんといっしょなら平気なの！」

で、なんか一匹のイタチ？と黒い塊がバトルを繰り広げてるんですが、

塊の方は突進してるだけで、イタチは防御したり逃げ回っているだけです。

魔力波動から、あのイタチがこの結界を作ったのだとは思いますが、最近のイタチは、魔法使えるのか・・・。

「ふええええええええええ！???なにあれっ!!???
けいいちおにいちゃん!!今日の夢にでてきたおばけといっしょだ
よー!!!???

っていうか、あのふえれっさんとさん、今日病院に連れて行ったフェレ
ットさんの!!!!!!」

うん、いい感じにテンパってますね。

「来てくれたんですか!?!ありがとうございます!」

イタチがこっちに寄って来たんだけど、
お前がこっちによってくると、あの塊が……
ほら!

なんかすっごい勢いで突っ込んで来るぞ。

「おい！！このクソイタチ！！こっち来んな！」

「えっ！？・・・あっ！！レイジングハート！！」

> round shield <

クソイタチが宝石を前に出したら喋ったぜあの宝石！！
やばい、欲しいかも。

ピンク色の丸い盾みたいな壁が出現し、塊の突進が止まり、
塊は、上空へ飛び上がって行き、・・・あれ、なんかどんどん大き
くなっていくんですが。

「ええええ？？？ええええええええええ！！！！？？？」

なのちゃんはさつきから一人で混乱してます。
ここは、とつとあの塊しばいてなのちゃんに説明してあげないと
ね。

「お願いです、あなたたちには力があります。僕に力を貸して下さい。
」

「ん？？あなた達？？なのちゃん・・・この子にも魔力あるの？？」

「えっ？あつ、はい。あなたより、そちらの女の子の方が、かなり

大きい魔力を持っていますが。」

なんだってー！！

俺より強い魔力って・・・ええー！？それはありえないだろ！
そもそも、俺がなのちゃんの魔力を感知できなかったから魔力そのものの概念が違うのかもしれないな。

「よくわからないけど、わたしに出来るならがんばるのー！！」

「じゃあ、この宝石を持って、僕の後に続いて起動パスワードを唱えて。」

「う・・・うん！」

「我、使命を受けし者なり」

「わ、われ、しめいを受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「えっと、けいやくのもの、その力をときはなて」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心はこの胸に！」

「そして、ふくつの心はこのむねに！」

「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ！」

「この手にまほうを！レイジングハート、セツトアップ！」

パ
ア
ア

え？？

俺が考え事をしてる間になんか起きてるんだけど!!
なのちゃんが……変身した!!

「ふええええええ!!な、なにこれえ〜〜〜!!」

「す、凄い！思った以上の魔力だ！」

なのちゃんは学校の制服みたいなしろを基調とした、かわいい服装になっていました。

「なのちゃん！かわいいよ～～！！！！！！」

「え???ほんとに!!!えへへ、嬉しいな〜。」

「うん、やっぱりなのちゃんには白が良く似合うね〜。」

「えへへ〜。」

いちゃいちゃ

「あのー、そろそろいいですか?」

「おお、イタチ君!君には感謝だな、
なのちゃんにこんな素敵なプレゼントをしてくれるとは。」

「うん!そうなの!ありがとうなの!」

「いえ、どういたしまして・・・じゃなくって!!
ジュエルシードの暴走体が!!」

?・・・ああ、あの塊が、

上空で律儀に待ってくれてるな、
あれか、ヒーロー、ヒロインの変身シーンでは絶対に攻撃しないっ
ていうお約束か。

「わたしはなにをすればいいの??」

「えっと、レイジングハート・・・その杖の名前だけど、それを使
って、

あの黒い塊の中にあるジュエルシールドって言う宝石を封印して欲し
いんだ。」

「え???どうやって???」

「それは、暴走体を攻撃で弱らせてか・・・」「よし!この俺に任せ
ろ!」・・・らって、ええ!」

俺は、そう言うやいなや、暴走体に向かって飛び上がって行っ
たが、
なんか、イタチ君がやたらと驚いているのが少し不思議だ。

「すごい!けいいちおにちゃん、空とべるんだ〜!」

黒い塊・・・何たらシールドの暴走体だったか、

「どっせ〜い!」

とりあえず蹴っ飛ばしてみた。

雲みたいだから効かないかとも思ったが、意外といい手応えを感じ
た。

あれ?起き上がって来ないんだけど。

もしかして、もう終わり??

「すごい、魔法を使わずに一撃で……。」

「わぁ！けいいちおにいちゃんすごいのー！！！！！」

とりあえず、なのちゃんの前に降りて、コスプレなのちゃんを抱っこしてみた。

「にゃ！どうしたの？けいいちおにいちゃん??」

「いや、なのちゃんが可愛いから抱っこしたかった。」

「にゃははー。けいいちおにいちゃんにかわいいって言うてもらってすごくうれしいのー。」

「あ……あのー、ジュエルシードの封印をお願いしたいんですけど……。」

「んぁ？ああ、そういやそんなこと言ってたな。で、どうすりゃいいんだ？」

「レイジングハートを使って封印できます。」

「けいいちおにいちちゃん、やってみていい？」

な、何だと！！！！

「だめ！！！！だめだめだめ！！！！いきなりあの塊が復活したらどうすんの！」

俺がやるからなのちゃんは下がってて。」

「けいいちおにいちちゃん・・・やってみたいの。」

うぐう、なのちゃんのオネダリ上目遣いはリーサルウェポンだ！

「けいいちおにーちゃん、お願い。」

お、お、お、おっもちかえりい~~~~。

は！？やばいやばい、鉈女が一瞬乗り移って来たわ。

「じゃあ、俺と一緒にやるならいいよ。」

「うん！けいいちおにいちちゃんといっしょにするの！！
フレットさん、どうやればいいのかな？」

「え・・・えつと、まずレイジングハートを捕獲用のシーリングモ

ードに移行させるんです、
それから、ジュエルシードに向かって封印と唱えれば、レイジング
ハート内に保管されます。」

「しーりんぐもーど???」

> sealing mode <

「ふえ！」

「うお！」

いきなりなのちゃんが持つてた杖、レイジングハートが、形態を変
えたのでびつくりした。

この杖、俺らの声聞こえてんの!?自我あるのかよ!

「その状態で、あの暴走体の体に封印、と唱えてレイジングハート
を近づけてください。」

「うん、わかったの!」

なのちゃんは、恐る恐る暴走体に近寄って、もちろん俺も隣でなの
ちゃんの片方の手を繋いでるけどね。

暴走体は、黒いのが薄くなっていて中から青く光る宝石が見えてま
した。

「これがジュエルシードだね、さあなのちゃん。」

「うん、けいいちおにいちちゃん、ちゃんと手にぎっててね。」

「え・・・えつと、じゅえるしーどふういん!」

> sealing <

> receipt number XVII <

「これで、封印は完了です、巻き込んでしまいすいませんでした。」

というと、イタチ君は氣を失ってしまいました。

「フェレットさん!」

「大丈夫だよ、氣を失ってるだけだよ。」

結果も解除されたみたいだし、とりあえずイタチ君はもう一回病院に連れて行こうか。」

で、榎原動物病院に着いたのですが、ここでもサプライズな出来事が・・・。

「すいませ〜ん。」

「あら、なのはちゃん、こんばんわ。」

「こんばんわ。」

「なのはちゃんが連れてきたフェレットなのだけど、どこかに逃げちゃったみたいなのよね。」

鍵付きのケージに入れていたはずなのに・・・。

「えっと、この子、うちまで来ちゃって、うちの前でたおれてたからまた連れて来ました。」

そう言っただけなのはちゃんは、医者にはフェレットを預ける。

てか、この医者どっかで見たことあるんだよね、誰だっけかな？

「そうなの、どうやって抜け出したのかしら。連れて来てくれてありがとうね。」

えっと、そちらの方はなのはちゃんのお兄さんかしら。」

「ええ、血は繋がっていないですが、兄みたいなものです。」

「そうですか……。間違ってたら申し訳ないのですが、あなた桂一君かしら？」

「!？」

「あれ？先生、けいいちおにいちやんの事知ってるんですか？」

「やっぱり！天河桂一君よね！」

「あ、はい、そうですけど。」

「やばい、誰だっけ？？思いだせん。」

「久しぶりね！元気だった？」

「あの、大変申し訳ないんですが……。どちら様でしたっけ？」

「え？……。そっか、もう十年位前に会ったつきりだから……。
槇原愛よ、覚えてないかしら。」

槇原愛……

！！

「ああ~~~~！愛ちゃんかぁ！耕介の従姉の！」

「そうそう、思い出してくれたのね。忘れてるなんて酷いわ。」

「いや〜凄くに綺麗になってたから全然わかんなかったよ。」

「あら？あらあら、口は凄く達者になったのね、お世辞でも嬉しいわよ。」

なんてサプライズ！

俺と耕介・・・槇原耕介は結構仲良くて、耕介が俺のことを弟みたいに見てくれてたんだよね。

それで、たまたま夏休みに遊びに来た愛ちゃんと知り合ってたっていう経緯。

10分位かな、久しぶりの再開でなのちゃんほっばいて話しちゃってただけど・・・

「むっ、けいいちおにいちゃん!」

「ん?」

なのちゃんが大変ご立腹な感じでした。

「二人ばかりでお話ししててずるいの!なのはもいっしょがいいの!」

「ああ、なのちゃんごめんね。」

「ごめんねなのはちゃん。」

「てか、もうこんな時間だから、今日は帰ろう、愛ちゃん、電話番号教えてよ、また今度ゆっくり話そ。」

「ええ、じゃあまた今度ね。」

「ええええ!なのはも先生とお話したいの!」

「なのはちゃん、先生もお話したいけど、早くおうちに帰らないとお母さん達が心配するわよ。」

また明日、フェレットの様子を見に来るでしょ、そのときお話ししましょう。」

「・・・はい、わかりました。」

「じゃあなのはちゃん、帰ろ。
じゃね、愛ちゃん。」

「先生、さようなら！。
けいいちおにいちゃん、手繋いで！」

そして、高町家につくと、門番に2名の鬼がいました。

「桂一君、何か言い残すことはあるかい？」
「桂一さん、何か言い残すことはありますか？」

ばれずに出て行ったと思っていたが、ごまかせていなかったようだ。
人外魔境高町家では常識は通用しないからな。

「ごめんなさい、おとうさん、おにいちゃん。

わたしがどうしても外に行きたいって言ってけいいちおにいちゃんに付いてきてもらったの。

けいいちおにいちゃんはわるくないの。」

「なのは・・・、判った、桂一君はなのはの為についていったとして、

何でなのははこんな時間に外にでたかったんだい？」

「そ・・・それは・・・・その・・・・。」

??

普通に声が聞こえたからって言えばいいのに。

「俺となのちゃんだけに、助けを求める声が聞こえたからですよ。」

「けいいちおにいちゃん!？」

「どういことだい。」

「魔法少女リリカルなのはって事です。」

むう、やっぱりこれだけじゃ通じないか。

「こっちは真面目に聞いているんだが。」

「こっちも真面目に答えてますが。」

要約すると、イタチ君から助けを求められた魔法の杖を貰って敵を封印した。

これだけです。」

あれ？今回は判りやすかったはずなんだが・・・。

「桂一さん、嘘つくならもう少しマシな事言った方がいいですよ。」

「失礼な！俺は嘘なんかついてないぞ！だよな、なのちゃん！」

「にや？・・・うん、けいいちおにいちゃんはうそついてないよ！」

やっぱり、人外魔境高町家の住民でも、魔法は理解できないのか。
でも、神速とかいって、脳のリミッターを一時的にはずしてゝとか
なんとか、
ある意味魔法じゃねえか。

「桂一君、魔法ってなんだ？そんなもの存在するのか？」

「まあ、実際に見てみないと判らないですよね。なのちゃん、変身
してみよっか。」

「じゃ、ぶっやって変身するの？」

「・・・いや、なのちゃんはさっきどっやって変身したのよ？」

「なんか、われしめいつけた・・・とか長い言葉言ったらへんしんしたの。」

「覚えていないと。」

「うん、ごめんなさい。」

>master<

「うお。」

士郎さんと恭也君が凄く驚き、きよろきよろしている。

「誰だ？この俺が気配を読めないとは。」

ああ、そういう意味か、

そうだよな、人の気配に敏感な2人が気づかない所に誰かいたとなつたら驚くわな。

「どうしたの？レイジングハート？」

> Please call "set up"<

「またか！？どこにいるんだ！？」

「士郎さん、恭也君、なのちゃんが持つてる宝石ですよ。」

「何！」「」

「えっと、助けてって言うてきたフェレットさんに渡されたの。」

> Please call "set up"<

・・・変身しなくても、レイジングハートが喋る所を見せるだけでよかったな。

「ほら、これが魔法ですよ！喋る宝石！ここの宝石には魔力が籠ってますからね。」

「けいいちおにいちちゃん、セットアップって言えばへんしんできるみたいだよ！やってみるね。」

「まあ、レイジングハートがそう言ってるからな。」

「よし、なのは、是非お父さんの前で変身してみてくれ。」

「兄としても見守る義務があるからな。」

見守る義務って何だよ。

士郎さんなんか、目を輝かせてるぞ。

「レイジングハート！セツトアップ！」

ペアア

いや、やっぱり可愛いですな。

MKNだな、マジで可愛いなのちゃん。

今年の流行語対象だわ。

「おお！可愛いぞなのは！さすが俺の娘だ！」

「そうだな、兄としても鼻が高いぞ！」

通常時では絶対見れないほどテンションがあがってますね。
まあこのMKNはそうっておかしくないほどだからな。

「で、桂一君、魔法というものの存在があるのはわかったが、これからののはは巻き込まれるのか？」

「それは判りません、発端になったイタチ君が気を失ったので病院に預けて来ました。」

明日、なのちゃんが学校帰りに様子を見に行くので、退院出来るようであれば連れて来てもらいましょう。

イタチ君に事象を説明してもらいます。」

「そうか、判った。明日も早いから今日はとりあえず寝なさい。」

なのは、夜に出掛けたい時は桂一君だけでなく、お父さんかお母さんにも必ず声を掛けるんだぞ。」

「はい、今日はごめんなさい。」

そして、もう一度なのちゃんと風呂に入ってベッドの中で魔法について話そうとしたんだけど、

なのちゃんがすぐ寝ちゃったので、また明日でいいか。

魔法少女リリカルなのは…なの（後書き）

うちのなのははあまり戦いません、悪魔じゃないです。

ちなみに、戦闘自体も少ないです、フェイトともほとんど戦わない予定です。

ちなみに主人公が本編でリリカルなのはとか言ってますが、なのは世界の宇宙人で転生者なので原作知識はありません。

これからよろしくお願いします。

もう一人の幼女？・・・なの（前書き）

遅くなつてしまいすいません。

先週の土日共に、奈々ちゃんライブ行つてきて疲労により執筆できませんでした。

平日も、仕事が忙しく、なかなか時間が取れませんでした、これからもちよつと更新速度下がるかと思いますが、見捨てずをお願いいたします。

もう一人の幼女？・・・なの

みなさん、こんにちわ。

さて、魔法少女リリカルなのはが誕生した次の日なのですが、俺は少し寝坊して、そして大変な事をやらかしてしまった。

「んふう、ちゅ、じゅるっ・・・ふにゃ・・・けいいちおにいち
やあん・・・んあ」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

かなり寝ぼけていて、同じベッドの中で寝てたなのちゃんにキスし
ちゃいました。

しかも思いつきり舌も入れて・・・。

「のわああ!!」

「にゃ!!」

やばい！これは非常にやばい！！
いくらのちゃんが可愛いとはいえ、寝ぼけてたといえ、9歳児に
キスしてしまうとは！！！！

「けいいちおにいちゃん・・・？」

今の・・・。」

「ごめん！なのちゃん！決してわざとじゃない！！って言ってもし
ようがないけど、とりあえずごめん！！！！」

「え？なんであやまるの？すぐきもちよかったよ！
えへへ、けいいちおにいちゃんにちゅーしてもらっちゃった、嬉し
いのー！！」

・・・まあいつか。

「そ、それよりなのちゃん、そろそろ着替えようか。
あと、キスしたことは土郎さんと恭也君には言っちゃダメだよ、俺
が殺られるから。」

「わかったの！おとうさんとおにいちゃんは、なかよくしてるとけ

いいちおにいちちゃんをいじめるもんね。」

ほつ、なんとか人外親ばかりとシスコンに追い掛け回されずにすむわ。

そして、なのちゃんに学校帰りにイタチ君を連れてきてもらおうようお願いしました。

翠屋は動物同伴禁止なので、今日なのちゃんは翠屋にはよらずに直接家に帰ってくるそうです。

その為、土郎さんに今日のバイトは休んでいいと言われたのでいきなり暇になりました。

俺は、基本的に平日09:00~18:00の勤務です。

土日祝日は、なのちゃんの希望により休暇となっています。

なので、なのちゃんが学校へ行ってる平日に休みがあると、やることありません。

とりあえず、自宅に戻って久しぶりにエゲーでもやりますか。

で、以前ゲットしていた B L D R S Y を早速インストール。
はい、そこ！古いか言わない！
ここ数年なのちゃんにかまいつきりだったから全然ソフトを買って
ないの！
でも、戯 の T E A M B L D R H E D の作品は大好きで、全
部プレイしてるのよ。

インストール完了し、O P M ー ビーを見たんだけど、やっぱり K
T K いいね。

O P だけでテンションが上がってくるわ。

ん、ちょっとお菓子と飲み物が欲しい、買出しに言ってきました。

やってきました某コンビニ！

中に入ると、外人幼女がいました。

何あの子？めがっさ可愛いんですけど、うちのなのちゃんにも負けてないくらい。

なんか、じーっとお弁当を睨んでるんですが、どうしたんでしょうか。

周りの客も、気になってはいるみたいですが、外人なのがいけない

のか、誰も声を掛けません。

よし、ここはロリコン検定準1級+バイリンガルな俺の出番だろ。
なんか一個特技増えてるって?? 気にスンナ!

「excuse me」

「ふえ??」

fe??もしかして英語圏の人じゃなかったか!?
しまったああ!!俺は英語しからんぞ!

「can you speak english?」

「えっと、あの、その……。」

eto ano sono??いや、違っだろ、明らかに日本語喋
ってるよな。

「日本語喋れるの?」

「え？あ、はい。」

o r z

まさかこんな明らかに外人ですって子が日本語話せるなんておもわないじゃん！！

でも正面から見るとほんとに可愛いな。

じい〜〜

「あつ、あの・・・そんなにみられるとはずかしいです・・・／＼」

「ああ、ごめんね。ところで、さっきからずっと弁当を見てたけど、どうかしたの？」

「えっと、このおかねでどれがかえるのになって・・・。」

そついいながら俺に諭吉さんを見せる。

「・・・やっぱり日本人じゃないな、てか子供に1万もたせてコンビニ出し行かせる親っておかしくね？」

「このお金ならここにある弁当はどれでも買えるよ。」

「そうなんですか、ありがとうございます。」

このせかいにきたのがはじめてだったので、よくわからなかったんです。

いまこのせかいのことをべんきょうちゅうなんです。」

!!!!!!!!!!!!

この世界に来たのが初めてって・・・普通だったらこの国に来たのが初めてとか、日本に来たのが初めてって言うよな。

まさかこの子も宇宙人？

凄く興味が湧いてきたぞ！

「じゃあさ、俺が日本の事教えてあげるよ。」

「ほんとうですか!？」

「じゃあ公園にでも行こうか。」

「あの、こうえんじゃなくてわたしのいえでいいですか、かぞくも
いっしょにいるので、

あつ、アルフってなまえなんですけど、アルフもいっしょにべんき
ようさせたいんです。」

な……なんだってえ……!!!!

アルフってALFか?? Alien Life Formなのか?

??メルマツク星人なのか!!!!???

リアルであんな顔してるのかな、俺結構好きだったんだよね。

マジ会って見たいわ〜

……ってそんなわけあるか……!!!

あれはテレビドラマの話だったの!!

「でも、いきなりお邪魔しちゃう悪いよ、お母さんもいるでしょ?」

「あつ……へいきです、わたしとアルフしかいませんから。」

あら、なんかへこんじゃったよ、高町家みたいになんか複雑な家庭環境なのかね？

「そっか、じゃあお邪魔させてもらおうかな。」

「はい、ぜひきてください。」

「そっだ、お名前教えてくれるかな？」

俺は、天河 桂一だよ、気軽ににおにーちゃんと呼んでくれればいいよ。」

「う……うん、わたしはフェイト・テストロッサです。よろしくおねがいします、お……おにいちゃん……。」

やばい、何この可愛すぎる生物……、なのちゃんより……。

くそっ、これが金髪ツインテの魔力か！！！！
ちなみに、敬語も止めさせました。
幼女に敬語は合わないよね！

で、俺が一人で萌え萌えしてる中、フェイトちゃんちにつきました。
駅近くのタワーマンションでした。
しかも最上階です。
なにこのブルジョワ??
あれか、俺の知り合いになる外人はみんな金持ちなのか???

「ただいま。」

「おかえり！フェイトー！」

犬耳と尻尾をつけたねーちゃんがでてきたぞ！
おい！こいつがアルフか！？
猫じゃなくて犬ってチヨイスがなかなかコアなねーちゃんだな。
ってか地球人じゃ無いっばいから、これがデフォなのか？

「ん？だれだいコイツ？？」

おいおい、初対面の相手にそれは無いんじゃない？

「えつとね、わたしがこまっているところをたすけてくれたんだ。それで、このせかいのことをおしえてくれるって。」

「ふーん、フェイトがいったいいうならアタシはなにもしないけど、

フェイトにてをだしたらただじゃおかないからね。」

俺はフェイトの目の前に手を出してみた。

「な・・・なに？？」

「いや、手を出してみた。」

「むきー！！フェイト！！コイツムカつくよ！！なぐっていい！？」

「はははー、面白いやつだな、俺は天河 桂一、宜しくな。」

「アンタなんかとだれがなかよくするもんか！！！」

「ア・・・アルフ、おにいちゃんもあんまりアルフをからかわないで・・・。」

こんなやりとりがあり、若干アルフには嫌われたかもしれんが、今はテストロッサ家でご飯タイムです。

アルフは、ドッグフードをひたすら頬張ってる・・・主食が猫だったら大爆笑なんだが・・・。
で、フェイトなんです、全然食べません、買った弁当を半分位しか食べずにご馳走様でした。

「フェイトちゃん！ご飯はしっかり食べなきゃダメだよ！」

「え？・・・でもあんまりおいしくないし、すぐおなかいっぱいになっちゃうから。」

「よし！じゃあ明日から昼ごはんは俺が働いている喫茶店に食べに来ればいいよ！」

俺が作ってあげるし、お代も少し割引してあげるから！」

「いいの？」

「おう、いいぞ、アルフも一緒においで！」

「ホントかい！！！」

「フェイトの家族なんだろう、ご飯は家族一緒に食べないとダメだろう」

「いやー、アンタいいヤツだねえ、さっきはわかったね。」

なるほど！アルフは食い物で釣れるんだな

特技：アルフの扱いLv1を修得した。

「じゃあ店の地図を書いてあげるね。」

あと、俺は基本的に厨房の中にいるから、案内した他の店員に俺を呼ぶように言ってくれればいいから。」

「うん、ありがとう、おにいちゃん」

ここから俺の質問タイムだ！

「で、さっきから気になってたんだけど、フェイトちゃんとアルフって地球人じゃ無いの??」

「「!?!」」

「・・・なんで??」

「どうしてわかったんだい??」

ばれたことを不思議に思ってるよこの子達・・・。

「まず、アルフみたいに耳や尻尾が生えている人型は地球上に存在しない。

それにフェイトちゃんが俺と会ったとき、この世界は初めて言っただでしょ、

普通だったら日本が初めてとかこの国が初めてって言うはずだからね。」

「そっか、わたしたちはこのせかいのじょうしきがないからすぐばれちゃったんだ。」

「常識は今日から俺が全部教えてあげるよ。
で、アルフは犬が変身したの？」

「アタシはイヌじゃない！オオカミだ！」

「アルフはわたしのつかいなんだ。」

「そうだよ、フェイトはさいこうのごしゅじんさまで、いのちのおんじんさね。」

「じゃあ、狼型にもなれるのか？？」

「なれるよ」

と言うと、アルフは赤い大型犬になりました。
いや、狼って見たことないからよく判らんのよね、赤いシベリアンハスキーって感じかな。

すっごくモフモフしたい、うん、してやろう。

もふもふ

「わっしやっしや~~~~~!!」

「お・・・おい！いきなり・・・くう、ダメ・・・あっ・・・くう

くくん。」

はっはっはっ、この俺の神の手からは逃れられないのだよ。
それにしてもツヤツヤツルツルして凄く気持ち良いさわりごごち
。。。

「くくくくくくくん。」

「ほっほっほっ、愛いヤツよのお。。。」

はうく、デレアルフかあいよく、。。。。犬だけど。

「あの。。。おにいちゃん、そのへんで。。。」

「むう、ご主人様に止められたらしょうがない。」

「くくくくん、

。。。。。。。。はっ!!

いやあく、けいいちになでられたらすごいきもちよかったよ、ま
たなでておくれよ。」

「おう、いつでも撫でてやるぞ。」

フェイトちゃんへの質問はこんなところで、勉強会を開始しようかねー。

って、気づいたら15時過ぎてました。

そろそろなのちゃんがイタチ君を連れて帰ってくる時間だよな。高町家に行かないと・・・。

「フェイトちゃん、悪いけど俺これから用事あるから帰らないといけないんだ。」

「ええ~~~~!?!」

「もうすこしくらいいいじゃないかい!」

「ごめんね、また明日、今日教えたお店で待ってるからね。」

「わかった……。」

「わかったよ。」

今、アルフは人型なんだけど、アルフの耳が垂れた!!!
やべ、超萌える！

「アルフ、店に来るときは、絶対に耳と尻尾は隠せよ。」

「わかってるよ。」

「じゃあね、おにいちゃん、またあした。」

「じゃね、フェイトちゃん、アルフ。」

結局 B L D R S Y 出来なかったな。

まあフェイトちゃんと仲良くなれたからいっつか。
でも、何で地球に来たんだろ？聞けばよかったな。今度聞いてみるか。

「ただいま。」

「あつ！けいいちおにいちゃん、おかえりなさい！」

ん？なんで自分の家じゃないのに”ただいま”って言うかって？
前に、お邪魔しますって言った時に、なのちゃんが、

けいいちおにいちゃんは将来わたしとけっこんするの！
だからもう家族なの！

家族だからけいいちおにいちゃんもただいまって言うの！

っていうからしょうがないじゃん。

「なのちゃん、イタチ君連れてきた？」

「連れてきたよ！今わたしのお部屋にいるの。ユーノ君って名前なんだって。」

なのちゃんの部屋に行き、イタチ・・・じゃなかった、ユーノ君の話を聞きました。
要約すると、

ユーノ君は、遺跡発掘を生業としているスクライアって一族の子供で、

今回、部族の仲間とロストロギアと総称されるジュエルシードを発掘した。

ロストロギアとは、時空管理局と呼ばれる機関に認定される、超高度古代文明の遺産である。

今回発掘したジュエルシードは、魔力結晶体であり、取り付いた物の本能的な願いを叶えるもので、

世界を滅ぼしかねない程の代物。

ロストロギアは基本的に時空管理局によって保管される決まりとなっており、

今回も例に漏れず、管理局まで輸送しようとしていたところ、輸送船が謎のトラブルを起こし、この世界（地球）にばら撒かれてしまった。

そこで、実際に発掘したユーノ君が責任を感じ、たった一人で回収しに来たのはいいが、

ジュエルシードが取り付いた暴走体にボコボコにされそうだった為念話を飛ばして、魔力資質がある人に助けてもらおうとしたとの事で、これからまた一人で回収するとか言ってるんだけど・・・それはちよつと無理そうなので、俺が手伝う事としました。

困ったことになのちゃんも一緒に手伝いたいと言われてしまいました。

俺は大反対です、怪我する可能性は大いにあるし、

下手したら死んでしまうかもしれない。

みんなを守る力があるなら、それを使ってみんなを守りたいってまあそんなこと言われても、みんなを守るなんて、9歳の小学生にできるわけ無いんだから・・・。

なのちゃんも引かないので、桃ちゃんと土郎さんが許可出せば連れて行くこととした。

ちなみに、ジュエルシードの暴走体には魔力攻撃しか通用しないらしい、桃ちゃん以外の高町家の面々にも手伝わせようかと考えたんだが、無理のようだ。

それで、ユーノが機能の暴走体に蹴りで行動不能にできたのかを不思議に思っていたらしく、俺が異世界の住人である事を教えた、ユーノの使う術式は見たことが無いため、ユーノとは異なる世界であ

ることは確実だ。

なのちゃんはかなり驚いたらしく、けいいちおにいちゃんがうちゅう人~~~~とかいいながらテンパってます。

一応なのちゃんには俺となのちゃん二人だけの秘密だと言っておいた。

ユーノも知ってるじゃんって突っ込みはなしな。

あつ、ちなみに、桃ちゃんも俺が異世界の人類で魔法使えること知ってるよ。

そして、土郎さんと桃ちゃんが帰宅し、なのちゃんとユーノを交えて一通り説明しました。

その後、なのちゃんは桃ちゃんと土郎さんの説得に成功していた。

土郎さんに、

「なのはのことよろしく頼むよ。」

って言われたので、いつもイジメられているお返しに、

「俺は、なのちゃんが付いて来るのは反対です、それはなのちゃん自身にも伝えています。」

だから今回俺は家族の心配や言葉を聴かずにわがままを貫くなのち

やんに対して何もしません。

実際に俺は今腹たってます、自分の娘が、明らかに危ないことしよ
うとしているのに止めない親が目の前に居るんですから。」

これは俺の本当の気持ちだけど、いざなのちゃんが危険なめに会い
そうになったら助けるけどね。

「うつ、そういわれるとそうなんだが、けいいちおにちゃんのお手
伝いがしたい

って泣きそうな顔で言われたらねえ、それになのはが俺たちに初め
て言ってくれたわがままだから。」

なのちゃんはユーノの手伝いじゃなく俺の手伝いをする気なのか。
要は、俺といっしょに居たいって事だよな。

「・・・わかりましたよ。俺もなのちゃんが傷つくのは嫌ですから
ね、責任は持ちませんが、守りますよ。」

「頼むよ、本当なら俺も生きたいところだが、俺達の力が通用しな
いなら返って邪魔になるだけだからな。」

こうして、明日から俺となのちゃんはジュエルシート搜索のために
しない従を駆け回る羽目になりました。

もう一人の幼女?・・・なの(後書き)

すいませり、何か中途半端なところなんです、長くなってしまったので一度切ります。

週一の更新を目指してがんばりたいと思います。

【外伝】 重なり始める想い〜高町 美由希〜（前書き）

すみません、つい書きたい欲求に負けて書いてしまいました。

時系列的には第4部

”魔法少女リリカルなのは…なの”

のちよい後です。

#内容に魔法の下りは出て来ませんが。

こんな形で外伝として本編と外れた話を投稿して行こうと思います。

ちなみにR15にしたのですが、別にエロくはないです、一応いれたほうが良いかな？くらいの内容です。

#基準が自分の中で微妙です。

【外伝】 重なり始める想い〜高町 美由希〜

皆さんこんにちわ、高町美由希です。
青春真っ最中のはずの女子高生です。

うちの家系は・・・といっても、父さんが結婚する前の家系なんですけど。

御神流と呼ばれる剣術をやっていました。
とある事件で、私と恭ちゃん、父さんの3人だけを残し、一族は亡くなっています。

今は、私を最高の御神の剣士にする為にと、父さんと恭ちゃんの指導を毎日受けています。

小さい頃からやっているので、友達と遊んだり、普通の学生生活を送ったことはありません。

好きで剣術をやっているのでも後悔はしていませんが、
高校生になって学校内の会話で、彼氏とかファッションとか化粧とか、全然ついていけません・・・orz

この前、学校の中で一番仲が良い友達から、彼氏が出来たと聞きました。

休み時間中、ひたすら惚気話をずっと聞かされたので、徹を込めて殴りたかったです。

徹というのは、御神流の基本的な技術で、相手の体内へ衝撃を徹すものです。

美由希も早く男見つけなよ

とか勝ち誇った顔で言われます。

私にだって好きな人はいます。

誰かと言うと、数年前に、うちの妹とあるきっかけで仲良くなった人です。

天河桂一さんって名前です。

私は桂一にいさんと呼んでます。

顔はかっこいいって訳でなく、普通なんですけど、性格が大好きです。凄く優しいんです。

桂一にいさんですが、母さんの元カレらしいです。

母さんと凄く仲が良くて、父さんよりも夫婦みたいです。

そこになのはが入ってくるもんだから、父さんが嫉妬して木刀使って追い掛け回しています。

すぐなのはに止められてますが。

でも、母さんと桂一にいさんって結構歳が離れていたと思うのですが、

どういった経緯で知り合ったんだろ？今度きいてみよ。

なのはは、いつも桂一にいさんにくっついてます。

羨ましい。

私も桂一にいさんに抱きついて、そして抱き返されて・・・
きゃ~~~~!!

もう、桂一にいさんのえっちい〜。

はっ!!

また妄想してしまいました。

ここ最近我慢できなくなります。

桂一にいさんのことばかり考えてて・・・。

彼女はいないって言ってたから今度告白してみようかな・・・。

そして、次の休日になんり恥ずかしいけど凄く嬉しい出来事があったのです。

まさか自分があんなことするなんて・・・。

とある休日、なのはは友達のすずかちゃんとアリサちゃんの家遊びに行つて、

桂一にいさんは翠屋の仕事がお休みだったので、当然のようになのはに誘われてましたが、

なぜか、本当に珍しいのですが、断つてました。

電話口でなのはが本気でへこんでて、ちよつと可哀想だったな。

でもこれはチャンス！と思つて、連絡もせずにつけいいち兄さんの家に行きました。

家にいなかったらとか考えずに私には珍しく、思つたままに行動してました。

ああ、やっぱり私、桂一にいさんが大好きなんだな

ピンポン

「はい、天河です。」

「美由希ですけど、遊びに来ちゃいました!」

「え・・・・・・・・・・まじで?」

桂一にいさんが驚きながら嫌そうな声で返答してきました。

そうだね、なのはの誘いを断る位だから、私なんて相手にしても
られないよね。

なんか、一気に気分が最悪になりました。

「ごめんなさい、迷惑でしたよね。・・・帰ります。」

「ちょ、ちょっと待って、ごめん!せつかく来てくれたしあがって
つてよ。」

「えっ?いいの?」

「いいよ、美由希ちゃんが来るなんて初めてだから驚いただけだよ。
鍵開いてるから入ってきて。」

「うん!お邪魔します。」

すっごく嬉しい。

さっきまでの最悪な気分が、一気に最高潮まで上がりました。
えへへ、桂一にいさんと二人きり……。

「で、美由希ちゃん、いきなりどうしたの？」

桂一にいさんの部屋に入ると、桂一にいさんはパソコンの前に座ってました。

ゲームやってたのかな？

桂一にいさんはゲームが大好きみたいです。
いつもなのは達とゲームの話をしてます。

「桂一にいさんと一緒に居たかっただけなんだけど……だめかな？」

「うぐう。美由希ちゃん、さすがに高校生になってそれは色々まずい。」

私が正直な気持ちを伝えるとまずいって言われました。
恥ずかしかったけど今日はせつかくのチャンス日なので私は遠慮しません！

「桂一にいさんはなのは事凄く可愛がって、将来結婚するとか言ってるけどそれって本気なの？」

私は、ずっと疑問に思ってたことを聞いてみました。

明らかに桂一にいさんとなのはの関係はおかしいです。

まだ小学生上がった位の歳ならわかりますが、もう三年生になっていて、

父さんや恭ちゃんとも一緒にお風呂入ったり寝たりしません。

桂一にいさんの方も、ずっとなのはに構っているので、彼女が居るわけありません。

「まあ、なのちゃんが大きくなって、それでも変わらない想いを持つていてくれたら是非とも嫁に貰いたいね。」

凄くモヤモヤする。

分かってる、なのはに嫉妬してるんだ。

嫌だ、今でもこんなに辛いのに…。

「私は？」

「へ????？」

「私だって、桂一にいさんが大好きなんだからっ！」

「……俺も美由希ちゃんは好きだよ。」

「なら、私と付き合って欲しい…です。」

言っちゃった！どうしよう、拒絶されたら死んじやうよ。

「真面目な話しだったんだね、ごめん、さっきのなのちゃんの話しも本気じゃないんだ。」

「えっ！？それってどういう…。」

「俺さ、愛してる人がいるんだ。」

「えっ？うそ？、嘘だよ！だっていつつもなのはと一緒にいて他の女の子なんて全然会ってないじゃん！！」

「少し理由があつてね、その人と恋人になることは二度と無いんだ。」

あ……

桂一にさんの初めて見る寂しそうな顔を見て一気に冷静になれました。

「……………」
「……ごめん…なさい。」

「いいよ、気にしないで、言ってなかったんだから。」

凄い自己嫌悪だ。

自分の都合だけで、桂一にさんの事を何も考えずに。

あう、嫌われたよね。でも、諦めきれないよ。

「じゃあ二度と誰とも付き合わないの？」

「そんな事はないと思うよ、実際に今美由希ちゃんに告白されて凄く嬉しいしね。」

「それなら…！」

「でも、まだ無理なんだ、だから俺が吹っ切る事が出来るまで待つて欲しい、恋人って特別な関係じゃなくても、俺が美由希ちゃんの事が好きなのは変わらないから。」

「桂一にさん……。分かった、うん、待ってる！私も桂一にさんがずっと大好きだから！」

ちゅっ

私は桂一にさんの唇にキスしちゃいました、凄く恥ずかしいけど凄く嬉しい…。

「桂一にさん、抱きしめて欲しいな。」

私がそう言つと、何も言わずに抱きしめてくれます。
あつたかい、凄く安心する。

もう我慢出来ないよ、桂一にいさんのものになりたい、桂一にいさんが私のものにならなくていい。

恋人じゃなくてもいい、私の事を見てくれるだけでいい。

「桂一にいさん、私を桂一にいさんだけのものにしてほしい。
恋人じゃなくてもいいの。私の体に私が桂一にいさんのものである事を刻んで欲しい。」

「み、美由希ちゃん！？それって……！？」

「そうだよ……桂一にいさんが思つてゐる行為で間違いないよ。
ずっと、多分初めて会つたときからずっと大好きでした。

こういう知識を知つた時から、桂一にいさんにならつて思つてたんだ。

だからお願いします。」

「美由希ちゃん……本当にいいんだね？」

俺も美由希ちゃんは好きだけど、まだ忘れられない愛しい人が別にいるんだよ。」

「構わないです。………お願いします、抱いてください。」

それから桂一にいさんは私にもよく構ってくれるようになりました。
なのはなんかたまに

おねえちゃんばかりズルイ！

って言う位ですが、まだまだなのはの方が桂一にいさんと一緒にいる時間は長いです。

でも、桂一にいさんがいつか私を本気で愛してくれる時まで私は頑張ります！

これからオシャレとか流行とかにも気をつかってみよ！

天河桂一ハーレム補完計画
第一部 美由希編

完！！

【外伝】 重なり始める想い〜高町 美由希〜（後書き）

はい、そうです。

外伝と言っ名の補完計画でした。

次回は本編の続きを書きます。

それでは今後ともよろしくお願いします。

新しいライバル！・・・なの？（前書き）

仕事が忙しくて暫く投稿できませんでした。
少し落ち着いたので再開します。

新しいライバル！・・・なの？

皆さんこんにゃにゃちわ！桂一です。

今日からジュエルシード探しを始めるんですが、基本的になのちゃんと一緒に探す為、相変わらず翠屋で働いてます。

で、昨日の約束を俺は忘れてました。

朝10:00翠屋の開店直後にホールから

「けいいち〜！やくそくどおり来たよ〜！」

「ア、アルフ！声大きいよ〜」

なんて声が厨房に聞こえて来ました。

それで思い出したけど、昼飯を作ってあげるって言ったよな。なぜに朝から…、まあいいかとりあえず接待しないとな。

フェイトちゃんとアルフをカウンター席に案内して、

「来るの早かったね、そんなに俺に会いたかったの（笑）」

なんて冗談を言ったのですが。

「う・・・うん、おにいちゃんにはやくあいたかったんだ・・・／
／」

や・・・ヤバイ、超力ワイイ！

両手の人差し指をつつきながら上目遣いで呟く姿ですよ！

moe（萌え）、moer（萌えらー）、moest（萌えすと）
萌えの最上級です。
もう抱きしめちゃいます。」

「フエイトは可愛いなあ~~~~！」

「ふぁ、お・・・おにちゃん、あったかい・・・。」

「おはよ！さっそく何か作ってくれよ、おなかすいちまったよ」

「はいはい、ちょっと待ってな。」

そう言つて厨房に戻ると半眼で、じと~~~~つて擬音が出そうな勢いで
桃ちゃんに睨まれた……。

「な……なに？」

「淒く可愛い娘達ね、いつ知り合つたのよ」

睨まれながら……つてアレ？何で？

「昨日ちよつとね、日本が初めてだつて言うから色々教えてあげた」

「ふ〜ん、淒く仲が良さそうね」

「何かやけにつつかかって来るけどどうしたの？」

「……………桂一は将来の息子だからよ」

「関係あんのか??」

「…あるのよ…多分」

まあいつか、とりあえず桃ちゃんとの話を切り上げて、料理始めますか。

「さあ、てめえら覚悟しやがれー！この桂一様が たっぷりと料理してやるぜー！！」

そんなこんなので、朝からお好み焼きを作りました。

ネタに走りすぎたか。

桃ちゃんが呆れ顔でこっちを見てくるので少しやっちまった感じがする・・・。

なぜ、洋食喫茶店でお好み焼きが作れるかというと、メニューには載せてはいない。

だが、なのちゃんが俺のお好み焼きが大好物なのである。

3時のおやつはホットケーキではなく、お好み焼きだ。

なので、材料は置いてある。

「ほいつ、フエイトちゃん、アルフ、お好み焼きだ。」

「おこのみやき・・・はじめて見た・・・。」

「なんか、びみょうな見ばえのりょうりだね、うまいのかい。」

「自分で作つといてなんだが、美味しいと思うぞ、食べ。」

「うん、いただきます。」

「いただきます。」

モグモグ

「・・・わあ！、お「けいいちー！これ美味しいよーー！！」・・・あう。」

フェイトちゃんが、感想を言おうとした時に、アルフが先に叫んじやったね。

しよぼーん（・・・）としたフェイトちゃんがめがっさ可愛いです。

こう、ぎゅゝってしたくなるよね、保護欲を掻き立てられる感じ。だから俺は、フェイトちゃんの頭を撫でながら、

「だから美味いって言ったら、フェイトちゃんの口にも合ったかな？」

って尋ねてみた。

「あつ、う、うんっ、とっても美味しいよ!」

ああ、にこにこ笑顔もやっぱりかぁいいねえ。

「いっぱい食べてね、ま、けいいち!おかわりっ!」・・・って
早えなおい。」

とまあ、俺の料理は好評で気づけばもう12時を回っていた。
翠屋も混みだして来て、あまりフェイトちゃんに構ってあげられな
くなりました。

「けいいちおにいちゃん、いそがしそうだからかえるね。」

「フェイトちゃんごめんね。」

「うん・・・またごはん作ってほしいな。」

「いつでも来てね、18時まではこの店にいるから。」

「うんっ!ごちそうさまでした。」

「けいいち、うまかったよ、また食べさせておくれよ。」

「おう、またね。」

そして、なのちゃんがすずちゃんとあーちゃんと一緒に帰って来ました。

「けいいちおにちゃん！！ただいまあー。」

「なのちゃん、すずちゃん、アーちゃんお帰り。」

「「「ただいま」」」

まず3人に飲み物を出してあげたら、あーちゃんに絡まりました。

「ねえけいいち、来週の日よう日は空いてるわよね？」

「ん、まあ基本的に休みの日はなのちゃんと一緒に居るっていう用

事があるけど。」

「すずかのうちでおちゃ会するんだけど来るわよね？
もちろんなのは来るわよ。」

「いく。」

当たり前だろう、可愛い幼女3人と一緒にお茶会なんて……。

思わずニヤけてしまいます。

1時間くらい談笑して、あーちゃんとすずちゃんは習い事で帰りました。

で、これからジュエルシード探索が始まります。

ジュエルシード発動の気配を追って八束神社まで来たのですが、そこには、でっかい犬とそれに捕食される直前の狐がいました。

「ふえええ、けいいちおにいちゃん！たいへんだよ！きつねさんをたすけてあげないと！」

「ジュエルシードが意思があるものに移ったから余計強力になつてる。」

あれ、ユーノいたのか。

「俺に任せてちょ、あの犬シバいて来る。」

と言いながら、ダッシュで

「キャベツチカカツカム！」

ワオオオオ〜ン

ばた

「わあ〜！けいいちおにいちちゃんすごい。」

「……………また一撃で倒しちゃったよ、けいいちは何者なんだろう。それにキャベツなんとかって…………？」

「よし、なのちゃん、封印してー。」

「はーい！」

「くう」。

ん？なのちゃんの封印シーンをチェックしたら下からかわゆい声が・
・

「狐か、大丈夫だったか？」

「くうくん！！」

狐はこっちの言葉がわかってるのか、俺の胸に飛び込んできた。
はぁ癒されるかわゆさですな

「けいいちおにいちゃん、ふういんおわったよ。あぁー！きつ
ねさんだいじょうぶだった！？」

「くうん。」

「かわいいの、私もだっこしたい。」

なのちゃんに狐を渡そうとすると、

「くうん！」

俺の胸にしがみついて離れません。

「何か俺に懐いちゃったみたいだね。」

「ううゝ、いいな、いいなゝ、けいいちおにいちゃんずるい！」

「なのはにはユーノ君がいるじゃないカ！」

「ふえれつとよりきつねさんの方がいいの！」

「ガーン・・・・・・・・orz」

ユーノ君が見事なorzになってる、可愛そうに……。

「あつ、そうだ、名前をつけてあげよう。」

「そうだね！けいいちおにいちゃん、何にするの？」

狐

狐だろゝ

f o x

うゝん

「よしっ！決めた！今日からお前は真琴だ！」

「まこと？なんかきつねさんっぽくないよ。」

「なのちゃん、狐は真琴に決まってるんだ！肉まんが大好きなんだ！将来人間になって”あうゝ”とか言うんだ！」

「えっ？ええっ？？？まことちゃん人間になるの？？？」

とかなんとかやり取りしていると、

ぽ
ん
っ

「くおんはくおん、まことじゃない。」

そして時は動き出す。

[illegible][illegible]

「真琴が本当に人間（？）になった！つてか獣耳！尻尾！ヤバイ可愛い！可愛すぎる！おっもちかえりいい！！！！。」

「まことじゃない、くおん！」

「あ、あ、あ、ごめん、久遠ね。」

「くうん！」

はあはあ、超かわいい、金髪獣耳テラヤバス！

久遠を抱き寄せて耳をナデナデしています。

アルフもメロメロにしたムツゴロウ検定1級を持つ俺の五斗ハンドにかかれば久遠もイチコロよ！

「けいいちおにいちゃん！くおんちゃんばっかりずるいの！わたしもがんばったの！」

「そうだね、なのちゃんも封印ありがとね。」

と言いながらも、久遠を撫でる手は止めていない。

「くうんふにゅ。」

「うー、だめえー！！！けいいちおにいちゃんはわたしのなの！」

「おいおい、いつから俺はなのちゃんのものになったんだ。」

「ううううー!!、わたしも!わたしもなでてほしいの!!」

そう言いながら久遠を抱きしめている手を顔を膨らましながら自分の頭の上に持つてく……。

「ああ、やっぱりなのちゃんもすごかわいいね。」

「ふにゃ〜」

YES! ロリコン! GO! タッチ!

「けいいち、くおんこわかった。たすけてくれてありがとう。」

「どういたしまして、そういうえば久遠はどこに住んでるんだ？」

「ううのじんじゃにすんでる。」

「そっか、じゃあまた来るよ。今日はそろそろ帰るよ。」

「やだ、まだいつしよにいたい。」

「だめだよくおんちゃん！けいいちおにいちゃんは今からわたしと一緒に帰るんだから！」

「じゃあくおんもいつしょにかえる。」

「え？でもくおんちゃんちはここなんでしょ？」

「べつにここにいらなくてもへいき、けいいちといっしょがいい。」

「いいんじゃないか、桃ちゃんも士郎さんも特に何も言わないだろ。」

「

「むうう。」

「ほら、なのちゃん、帰ろう。手繋ごうね、久遠はこっち。」

「うん！」

「うん」

両手に幼女……いや、マジで興奮します。

「あつ、くおんちゃん、わたしは高町なのは、なのはって呼んで。」

「うんわかった、よろしく、なのは。」

「・・・・・・・・あの、僕は空気ですか・・・・・・・・。」

「あつ！ごめんねユーノ君」

ユーノ君の存在を完璧に忘れてた・・・・。

「いたちがしゃべった、けいいち、これなに??」

「いたちじゃない！これって言うなあ・・・・！！！」

「ごめんなさい、ねずみさん。」

「もっと違うよあ・・・・！！！」

つてな感じでグダグダでしたが、無事ジュエルシードを封印し高町家へ帰宅したのですが・・・

「久遠！」

「あつ、きょーや。」

「あれ？知り合い??」

「俺の高校時代の後輩の友達ですよ。」

「そうなんだ、意外と世間は狭いね。」

「なぜ桂一さんと久遠が??」

「ジュエルシードを探してたら、久遠がピンチだったから助けてあげた。」

「けーいちもきょーやとおなじで、いのちのおんじん。」

「ん？恭也君ともなにかあったの？」

「実は・・・」

恭也君説明中、長いので簡単に要約すると。

久遠は300年くらい生きてる妖狐。

封印されてた力が暴走しそうになって恭也が止めてくれたってことらしい。

もっと詳しく知りたい人はとらハ3的那美ルートをやってくれ。

・・・はっ！？今変な電波を受信したぞ。

「へえ、じゃあくおんちゃんはおばあちゃんなんだね。」

なのちゃん・・・、それは酷いんじゃないか。

そんなこんなで桃ちゃんと土郎さんにも説明して、今日は一緒にご飯を食べて

風呂に入って、一緒に寝ました。

俺、あんまり家に帰って無いね。

お嫁さんが増えた！・・・なの（前書き）

また間が空いてしまいました、すいません。
皆様の暇つぶしになれば光栄です。

今回は超ご都合的な展開です。

無理やり感がありますが、温かい目で読んでやってください。

お嫁さんが増えた！・・・なの

おはこんばんちわ

みんなのアイドル、天河桂一です。

今日は翠屋JFCという土郎さんが作った・・・と思われる、少年サッカーチームの試合があるそうです。

なのちゃん、すずちゃん、あーちゃんの3人は応援に行くそうでも強引に誘われました。

サッカーあんまり興味ないんだよね。

やるのは嫌いじゃないけど、見るのは微妙・・・。

マンデー ツトボールでハイライト見るくらいが一番いい。

あつ、でもメシは好き。俺と同じ年だから1つ上だよな、すごい人だよな。

「けいいちっ！ぼーっとしてないでおうえんしなさいよ！」

「頑張れ！負けんな！もっと走れるだろ！お前なら出来るって！もっと熱くなれよ！！本気出せ！！！！」

修 つぼく声出してみました。

「がんばれー！まけんなー！あつくなれー！！！！ほんきだせー！！！！！！」

なのちゃんが俺の真似して声を張り上げてます。

その姿にめっちゃMOEです。

MOEを強化しすぎて運の良さが70位上がったちゃいます。

そんなこんなで翠屋JFCが勝利をしました。

この後翠屋で勝利パーティーを開催するようです。

んで、帰り際、サッカー少年がジュエルシードを持っていたのを、
なのちゃんが発見しました。

「けいいちおにいちゃん！あのキーパーやってた男の子がジュエル
シード持ってたっばいの！」

「ん？マジか、ちょっと聞いてみるよ、ジュエルシード一個貸して。」

俺はなのちゃんからジュエルシードを一つ借り、少年Aの元へ。

「ねえ、ちよつといい？」

「ん？なに？」

「君、こんな石持ってないかな？」

そう言っつてジュエルシードを見せる。

「持つてるよ、この前ランニングしてたとき拾ったんだ。」

「それ譲ってくれないかな？10000円でどう？」

やっぱりこのくらいの年代の子にはお金でしょ。

「マジで！こんな石で1000円もくれるの？いいよ！」

「ありがとう、はい1000円。」

「よっしゃー！ラッキー！！！」

ラッキーなのは俺なんだけだね。

コーノ君から聞いた話だと、管理局に買い取ってもらえば1個でサラリーマンの年収を軽く超えるとかなんとか。

「はい、なのちゃん、貰って来たから保管しておいて。」

「はい。」

っていうやり取りを、すずちゃんとあーちゃんにばれないようにやってました。

だからこそかな、いきなりあーちゃんに

「なのはとけいいちはいつも二人でコソコソ何やってるのよ。」

「あつ、それ私も気になるなあ。」

「えっ！？な、何もしてないよ。」

「うそに決まってるわね、あわてすぎよ！」

「俺となのちゃんの二人の秘密だよね、なのちゃん。」

「あつ、うんっ！けいいちおにいちゃんとのひみつだよ。」

なのちゃんは二人だけの秘密つてところが嬉しかったのかすっごく良い笑顔で抱きついてきます。

「ちょっと！あたし達にもいえな・・・ずるい・・・ずるか??」

「ずるいよ！なのはちゃんばかりずるいっ！いっつも、いっつもけいいちにいさまと一緒にで！」

私もけいいちにいさまと一緒にいたい！」

「えっ、だっ、だめだよ！けいいちおにいちゃんはわたしとずっと一緒だもん！」

えっ？なにコレ??二人だけの秘密、とか言っただけなのに、いきなり一緒に居たいとか・・・
幼女の修羅場・・・?

「あ・・・つて。」

「ん？あーちゃん何か言った？」

「あたしだつてけいいちの事好き！大好きだもん！」

まじか!??なんだそれ!??

あゝあゝ、なんか取っ組み合いの喧嘩しそうな勢いだな・・・

桃ちゃんも笑ってないで助けて欲しい。

士郎さんは黒い笑みで包丁砥いでるし・・・。

サッカー小僧達はみんな帰宅しているからまだ良かった。

「あらあら、じゃあアリサちゃんとすずかちゃんも桂一のお嫁さんになればいいんじゃないの？」

「をい！桃ちゃん！何を・・・」「うんっ！！！」って二人とも・・・。」

「だって、私、けいいちにいさまの事あいしてるもん！」

「あたしもっ！けいいちあいしてるっ！！！」

そんな馬鹿な、なんというハーレム。。。

我が生涯に一片の悔い無し！

「あゝ、二人ともかあいねえ、じゃあ二人も将来俺のお嫁さんだね。」

「えへへ、うれしいな！」

「やった！」

[illegible]

まあ解つてたけどむくれるよね。
そこに桃ちゃんの爆弾発言が・・・

「なのは、別に桂一と離れるわけじゃないんだから、そんなにむくれないの。」

それに、大好きな友達と同じ人を好きになっただから、みんなで

ずっと一緒にいられるわよ。」

何言っただこいつ!?

「あつ! そうだね!!! 3人でけいいちおにいちちゃんのおよめさんだからずっと一緒なの! うれしいの!」

ああ、なのちゃんも納得してるよう、なんて純粋な子なんだろう。それにしても桃ちゃんは何考えてんだかさっぱりわからん。

つか士郎さんはどうした? こんな話してれば一番に襲ってきそうなんだが。

あつ、店の隅で気絶してる……。
いったい何があったんだ??

「じゃ・・・じゃあ、にいさま、ち・・・ちかいのきす・・・して・・・ほしい・・・な」

ブフオツ！！！！！！萌え！萌え！！萌え！！！！！！

マジ可愛いよ～～～すずちゃん反則だよ。

兩人差し指をちょんちょんしながらの上目遣い！・・・なんて恐ろしい子！

「あつ・・・あたしも！お・・・おねがい・・・します・・・。」

グハア！！！！あ～ちゃんまで同じポーズで・・・

止めて、俺のライフはもうマイナスよ！

「わたしも、わたしも～～、ちかいのちゅ～～、またけいいちおにいちゃんとちゅ～したいの～。」

をい！

「「なのは（ちゃん）！」また”ってどういうこと！：！。」

「あらあら！なのははもう桂一とキスしちゃったの？」

「うん！この前けいいちおにいちゃんと一緒にねてる時にしてもらったの！」

「あら、桂一も手が早いわね、……土郎さんを（締め）落としておいて良かったわ（ぼそっ）」

「「ずるいつ！：！。」」

「にいさま！私も！はやくしてっ！」

「けいいち！はやくしなさいっ！」

ああ……さっきまでの超萌えシチュエーションが……。

でも、まあいつか。

こんな可愛い子にキスできるんだから。

chu!

「あ……。」

chu!

「ん……。」

すずちゃんとおーちゃんの唇はとっても柔らかかったです。
もうむしゃぶりつきたいくらいです。

というわけで、もう一回。
すずちゃんの口内からがつついていきます。

「んう!!……んあっ……ちゅ、ちゅ、ちゅる、んうっ……
はあはあ。にいさま、きもちいよ、もっとお。」

ああ、9歳でなんて卑猥な顔をする子でしょうか。
もう色々振り切って突き破っちゃいそうです。

「次はあたし！あたしにもして！！！！」

「わたしも、はやくっ！はやくっ！！」

そんなこんなで、追加で幼女2名が将来の嫁になりました。
将来どうなるんだろ……。

さて、幼女3名といちゃいちゃした次の休日になりました。
すずちゃんちでお茶会です。

恭也君が運転する車で向かいましたが、なんとすずちゃんのお姉さんが

恭也君の彼女という話を聞きました。

ふーん、で？って感じだけどね。

さて、すずちゃんの前に着いたのですが、ここは本当に日本か！？いや、お金持ちとは聞いていたけど、コレはすごいな。

「けいいちおにーちゃん！はやくいこー！」

ん、ぼーっとしてたらなのちゃんに呼ばれました。
後で家の周りを散歩してみたいな。

「けいいちにいさま、おかえりなさいませ。」

え??????

すずちゃんが着物着て三つ指付いて頭下げてます。

恭也君となのちゃんも固まっています。

「ほら、ファリン、ノエル（ぼそっ）」

んか小声で両サイドに立っていたメイドさん（？）に何か言ったぞ。

「お帰りなさいませ、旦那様、お荷物をお持ちいたします。」

とか言ってメイドさん1号に俺のバッグが盗られた。

「旦那様、お帰りなさいませ、お召し物をお持ちします。」

今度はメイドさん2号（こっちの子の方が俺の好みだな）に羽織つてた上着を盗られた。

てか、何コレ???

「けいいちにいさま、こちらにいらしてください、すずかはにいさまが来るのを待ちわびてました。」

何なんだ！？洋館チックな内装とすずちゃんの着物が微妙にミスマ

ツチだ！

あ、でも、とっても似合ってたて可愛いんだけどね。

「あゝ、すずかちゃん、忍はどこかな？」

恭也君ナイス！

「・・・・・・・・・・。」

あれ？すずちゃんは、頭を下げたままなにも答えないんだけど、いったい何なんだ？

「あゝ、ノエル、忍は・・・・。」

恭也君がメイドさん1号に声を掛けたんだけど、何も反応が無い。てか、メイドさん2名は俺のバッグと上着をそれぞれ持って、俺の斜め後ろにじーっと立ってるんだよね。何がしたいのかが・・・・。

あつ、もしかして！

「うむ、今帰ったぞ、出迎えご苦労。」

ちよつと偉そうに言ってみた。

「えっ？ええっ！？」

なのちゃんは相変わらずテンパるね。

俺の発した言葉は正解だったのか、すずちゃんが顔を上げて若干赤くなった顔をして嬉しそうにこう言った。

「に・・・にいさま、お風呂にしますか？ご飯にしますか？それとも、わ・・・わたしにしますか？」

ぶふつ

何コレ！？超萌え！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

てかやっぱりコレがやりたかったのか！！！！

すずちゃんサイコー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

何コレ珍百景に応募したいぜ。。。

問答無用で珍百景に確定だわ！

てか俺勝ち組！世の中のロリコン共に自慢してやりたいね！！！！！！

もちろん俺の答えは・
・
・

「さあ、すずか、俺の部屋に行こうか。」

「何ですかあ!!!」

ドゴツ！！

「いったあああああ！！！」

恭也君に殴られた、いつも持つてる剣の鞘で思いつきり殴られた。

超痛いから、マジで。

「につ、にいさま！大丈夫！？（あわあわ）」

「けいいちおにいちゃん！？…………おにいちゃん、何でなくったのかな、かな？？」

あつ、なのちゃんの背後に鉈女が…………幽波紋かつ！！

「待て、なのは！あれは、桂一さんは将来なのはと結婚するんだよな、だから浮気はダメって意味でだな！」

「いいの！すずかちゃんもけいいちおにいちゃんのおよめさんになるの！」

「な…………なんだと！！それも許さんぞ！！！！！」

なんで恭也君に…………ってそっか、恭也君はすずちゃんの姉と付き合ってるんだっただか。

「恭也さん……………」

「どうした、すずかちゃ……………」

ああ、すずちゃんの目が病んでるよ、すずちゃんは病み系だったのか…………。

「せつかく、けいいちにいさまが私の事欲しいって言うてくれたのに、じゃました……。」

ガクガクブルブル

なのちゃんと肩に乗ってるユーノ君が真っ青になって震えてるよ。ってユーノ君いたのか。

恭也君も冷や汗を流してるね。

てかずちゃんが欲しいとは一言も言っていないんだけど、どんな脳内補正されたか気になる。

それにしてもちよっとおかしな位の威圧感だね、まるで……

「じゃました、じゃまされた、きょうやさんがじゃました……。」

すずちゃん怖いよ。俺がどうにかしないとだめだよね。

「すずちゃん。」

俺はすずちゃんを優しく抱きしめました。

「ふあっ、にいさま……。」

「ちょっと喉かわいちゃったな、早く一緒にお茶飲もうか。」

「う・・・うん。」

まあ、そんなこんななハプニングがありました。
もちろん恭也君へ「貸し1ね」って貸しを作っておきました。

で、恭也君が探していたすすちゃんの姉、忍ちゃんですが、
面白そうだからと、ずっと扉の向こうで覗いていたらしく、恭也君
から愛のでこピンをくらってました。

あれ超痛いんだよね。

今、俺たちはすすちゃんの部屋で紅茶を飲んでまったりしてます。
恭也君は忍ちゃんの部屋に行ったためココにはいません。

それと、何故かあーちゃんがまだ来てません。
待ち合わせの時間をもう30分過ぎてます、時間に正確なあーちゃん
にしては珍しいな。

「あーちゃん遅いね、どうしたんだろ？すすちゃんに連絡とか来て
ない？」

「来てないよ、本当にどうしたんだろっ。」

「わたし電話してみるよ。」

てな感じでなのちゃんが電話しだしたときに、

「にいさま。」

「ん？何？？」

「あ、あ・・・あのね、さっき私の事すずかって呼んでくれたでしよ。」

「ん、ああ、玄関でのコントの時ね。」

「コントのつもりは無いんだけどなあ（ぼそっ）。」

「ん？何？」

「あっ、それで、今度からはすずかってよびすてにして欲しいなっと思って・・・」

ああ、もう何でこの子はこんなに可愛いのか！！！
俺のすずちゃんがこんなに可愛いわけじゃないっ！！！！

「にいさま・・・だめ・・・かな？」

「いいよ、じゃあこれからすずかって呼ぶね。」

「やった、すごくうれしいな・・・。」

こんなイチャラブなやり取りをしているとなのちゃんが、

「アリサちゃんは今おうち出たって！着ていく服をえらんでたらお

そくなつちやつたつて。」

「へえ、アリサちゃんがめずらしいね、やっぱりけいいちにさまが
まがいるからだよね。」

「あーちゃんの着飾った姿か、可愛いんだろうな、楽しみだな
。」

「けいいちにさま、私のこの着物はどう？にあうかな？」

そういえば、心の中では可愛いって連呼してたけど、実際に言っ
て無かったね。

「よく似合ってるよ、とっても可愛い。」

「えへへ、ありがとう。」

「むう、けいいちおにいちゃん！わたしは！？」

「なのちゃんももちろん可愛いよ。」

と言いながら頭なでなでしてあげる。

「ふにゃ、けいいちおにいちゃんになでなでされると気持ちいい
の。」

「にいさま、にいさま、私もなでて！」

「はい、よろこんで。」

「ふあゝ、私にもいさまになでられるの大好き。」

コンコン

「すずかお嬢様、アリサちゃんがいらっしやいましたよ。」

なでなでしていたら、先ほどのメイドさん2号が現れた。

この子はファリンちゃんと言う名前で、じゃあリンちゃんだねって言ったら、泣きながら

”旦那さま一生付いていきますっ！！”

とか言われた、あだ名を付けられたのが嬉しかったみたい。

リンちゃんはすずかの専属メイドで、先ほどのメイドさん1号、ノ

エルは忍ちゃん専属らしい。

いいなあ、メイド……。

特にリンちゃんの方は超好みな感じなんだよね。。

「だ……旦那さま、そんなに見つめられると恥ずかしいです。」

「あ、ああ、ごめん。」

「あつ、でも、旦那さまにだったらずっと見つめられててもいいですよ。」

あれ？あだ名つけただけでフラグって立つものなの……??

そんなこんな会話をしていたらあーちゃん登場です。

「お待たせ、おくれてごめんなさい。」

うん、とりあえず超可愛い！どんな格好かはもう各自想像してくれ、うまく伝えられん。

「うわあ、アリサちゃん今日はすっごいかわいいね。」

「ちょっとなのは！」今日は”って何よ！いつもはかわいくないみたいじゃない！」

「あーちゃんはいつでも可愛いよ、でも今日はもっともっと可愛いねー！」

「えあ……、あ……ありがとう……。」

そんなこんなで、あーちゃんも到着し、色々雑談をしていたら、ジエルシードの発動を感じしました。

「（ユーノ君、けいいちおにいちゃん、どうしよう??）」

なのちゃんがどうやってこの場から離れるか考えていると、

「（僕に任せてー）」

ユーノ君はそう言つと、”きゅ”とか大声で言いながら外に出てってしまった。

「あつ、ユーノ君！わたし追いかけてくるね！」

「ちょっと待った。」

なのちゃんが、いきなり追いかけようとするので、腕をつかんで待ったをかける。

「俺が探してくるから、なのちゃんはどこにいて。（ジュエルシード取ってきたら後で渡すよ）」

「うん、わかったの。」

「にいさま、私も一緒に探すよ。」

「3人は気にせずここにいて、ちゃちゃっとツ捕まえて来るから。」

そう言つて、ユーノ君を追いかけて、ユーノ君によって展開された結界内に突入したんだけど・・・
なんだかなあ。

「にゃ~~~~お!」

「やる気削がれるなあ〜。」

「あ、桂一さん。」

「あの猫は大きくなりたいとか思ったのかね。」

「多分そうだと思います、どうでしょうか。」

「う〜ん、猫を殴るのはちょ〜つと気が引けるなあ。」

とか何とか思っていると・・・

” Photon Lancer ”

「にやああああー！！！！！！。」

金色の矢に貫かれて元の大きさに戻り、気絶しました。

「ミッドチルダ式の魔法だ・・・誰！！？」

ユーノ君と一緒に上を見上げると・・・・・・・・・・

「あつれ〜？フェイトちゃん？」

多分フェイトちゃんが、微妙に体の一部がHOT HOT そうな格好で浮かんでいました。

「お、おにいちゃん！？なんで？」

「けいいちー!!」

アルフが狼形態で飛びついてきたので、こねくり回してやる。

「あふう、くうん、やつ、ぱり、あう、けいいちに、な、でもらうと、きもち、いい。」

「お、おにいちゃん！おにいちゃんもジュエルシードをさがしてるの!？」

「けいいちさん！知り合いなんですか？」

あゝ、説明がメンドイな・・・、まずはお互いの自己紹介して、かくくしかじかで・・・

ってな感じで、フェイトちゃんとユーノ君に経緯を話しました。

「そうなんだ、じゃあジュエルシードは本当はユーノのものなんだね。」

「うん、でもフェイトお母さんは何でジュエルシードを欲しがってるの?」

「わからない、でも私は母さんにまた笑ってほしいからがんばって集めるんだ。」

ううう、フェイトちゃんいい子だね、お兄さん感激だよ。

「なあ、ユーノ君。結局管理局こないし、フェイトちゃんにジュエルシード譲ってあげない？」

「えっ！？いいの！？」

「桂一さん、ジュエルシードは危険なものです、僕も今の話を聞いて譲ってあげたいと思うんですが……。」

「じゃあ、こうしよう。フェイトちゃんのお母さんに会わせてもらって、話を聞いて決めようか。」

「あ、はい、それなら僕も構いません。」

「いい？フェイトちゃん？」

「うん、うん！おにいちゃん、ありがとう！」

なんて和気藹々やってアルフが一言も喋ってない事に気が付いたんだけど、俺の腕の中で寝てました。

このときアルフにフェイトちゃんの母親のことを事前に聞けていればあんなことにならなかったのに……。

「じゃあ、早速今から行こう！」

「えっ！？なのは達はどつするんですか？」

「電話するよ。」

なのはに電話して、ちょっと緊急で用事が出来たからユーノと帰る、
詳しい説明は後でと伝え、

すずかとあーちゃんにも代わってもらい、説明と愛の言葉を囁いて
何とかごまかす。

「さあ、フェイトちゃん行こうか。」

お嫁さんが増えた！・・・なの（後書き）

さて、次話は最強狂人ママさんとの対話です。
とんでもなく都合いい話になります。

基本的にこの小説にはバトルらしいバトルはありませんのでだいた
いお話です。OHANASHIじゃないですよ。原作無印も私見で
は、二人とも戦う必要はないと思ってますし。まあ、話を盛り上げ
る為には必要ではありますが・・・。
これから宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4509m/>

とある青年と魔法少女達の物語

2011年6月29日18時33分発行